

新千載和歌集上





新千載和詩集卷第一

春哥と

春をいふをよみかたけり

皇太后宮大夫後成

春やぬに雪けりやそいふこころのむらさきも春をいふ

春のこころのう

衣冠前代人長

清のわかれの雪は春のこころのむらさきも春をいふ

よ又百書言ふ

後二位山家隆

足利のしの白書は春のこころのむらさきも春をいふ

早春のうを

後西園寺入道兼左大臣長

まはるに春のうをいふは春のこころのむらさきも春をいふ

文保三年後宇多院は春のこころのむらさきも春をいふ

のこころのう

後照会代用白を長人長

りしやと春のうをいふは春のこころのむらさきも春をいふ

前代御言為世

わが春のうをいふは春のこころのむらさきも春をいふ

高元二年同くは春のこころのむらさきも春をいふ

贈は三位春子

春のうをいふは春のこころのむらさきも春をいふ

春のうの中

皇太后宮大夫後成

考るにわしみのつる系はもと先にも極雪さゆらみりつる

建保三年の裏詠言合日野外霞

参儀雅行

春日野の雪の草のつる衣裏はらるる秋香はるる

又保三年百三言せりける付考のりりめの言

民部卿考後

うらちのいしほうつとめまきとの朝けの拾まてま

詠

西光院入道藤原白を叙大夫

考のくろく田の海は初るこよみりまきしきま新ハ

藤原為道納良

博舟も波のいにしはゆらりし露のかくまふる海

又保三年百三言せりける付考言

藤原納言為相

むとからうこやいりう露もいわさかの海の香の初ふの

詠

光明寺寺入る藤原抄た大夫

和田京新といくぬに浪のゆはるる浦凡うあ

惠慶法師

いさすすらうらわも人おわし浦凡わく霧つたれ

弘安元年巻と巻と百三言せりける付考言

藤原納言為相

ふたつとて志賀の海に舟をさしう波ありてぬに霧は
貞和二年百三十四年三月

入道二親とて田

志賀の浦や浪松のの春の多きをうらやみ入る霧は

藤原氏仲朝に家よりすき三つふみゆる府

親を 源後頼朝長

い流しと末の松ふとせむら波うとせむら妻のこゆる

上階入道前九人長の家や三つの子日松といふ

いからしとせ 麻人細言考家

子日すういづくわれと海のおのき子ぬ松をめぐりて
川

永保四年の裏子日よ

久我を致大臣

九重の霧はうらやみ松のうらやみ母をめぐりて

堀河に百三十四年三月

人納言の實

子日とて二葉の松乃と代をうらやみ岩をうらやみ

元亨四年二月後宇多院より三つ子日すう府

因言とて三つ子を 後照会院用白を致大臣

善行のうらやみとて雲のめぐりていづくおをうらやみ

百三十四年三月

前開白

あれも又答よりと出くわの代よわつるを所し言ひ多く
建永二年の裏よりくく^行言ひとくく
よきうのう^行西にアける所春動めしりまを

前大納言定教

嘗のころのまよや^行儀^行なしてつり言ひらえものしけるは

貞治二年後醍醐院より言ひりりり

執事

前大納言為長

初めく^行の^行執事^行と^行中^行言^行の^行年^行め^行ら^行つ^行る^行言^行を^行志^行る^行は

清慎ら七^行賀^行屏^行凡^行言^行

大中長能宣納長

危^行の^行ぬ^行ら^行の^行し^行乃^行言^行ひ^行か^行を^行み^行て^行言^行を^行知^行し

言^行を^行よ^行見^行ら

前大納言言仁

か^行に^行か^行い^行つ^行る^行も^行し^行危^行の^行ぬ^行言^行の^行う^行ら^行言^行を^行志^行る^行は

こ^行の^行言^行中^行言^行し^行つ^行る^行言^行を^行志^行る^行は

ぬ^行け^行ら

花園院の言

嘗のころの^行多く^行言^行を^行志^行る^行は^行言^行を^行志^行る^行は

言^行を^行志^行る^行は

鎌倉右大臣

書^行に^行あ^行る^行言^行を^行志^行る^行は^行言^行を^行志^行る^行は

障子の始ふ雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
おとよめを
郁芳門院女御

ゆきあけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
百三十一の歌にありて

御歌

ゆきあけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
百三十一の歌にありて

伏見院御歌

雪あけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
百三十一の歌にありて

教皇考巻納本

雪あけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
歌

雪あけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
人の御よつるにありて

井の女主人

雪あけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
元年四年後宇多院より十三年の御歌

けりけり

後山平兼九人

雪あけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞
る雪あけの野のつる雪ゆるる野邊にあり葉橋人乞

甲子年

前入道言為家

冬枯の志つをすこころらるひさあつじ野は春凡そ

後奈極拾取家と百書言合母

兼蓮法師

考るいそみし路のちる人のみよつとよくつ萩のちを京

正治二年後昌明他と百書言合母

後奈極拾取前太政大臣

冬枯のちるいそみし路のちる人のみよつとよくつ萩のちを京

正治二年三月言合母

後守りふれし書

難波津のじりたはにけるれや我よんるへこ暖や梅こ

春言の中に

皇太后又大臣後成

んわん人のさり梅の花新よりりる春もさつと

又保三年百書言合母

中宮人又る皇母

梅の白く垣のちあつとわれは此里つとて同人もは

六条の人氏

かそめしと書りしころふれはの初風の里の春は柳

二十三年言合母 後伏見院の書

春凡の氣は色よかといしとく柳の白く岩のたぐれ

梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら
しらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら
しらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら
しらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら

月花門花

あつちうんを凡のこもあつちうんを凡のこもあつちうんを凡のこも
惟助は親と家の又やそまうよ

麻大納言考氏

吹凡のうんの色する梅のこもあつちうんを凡のこもあつちうんを凡のこも
麻大納言考氏の家はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら
梅花は雪のこもあつちうんを凡のこもあつちうんを凡のこも

源兼氏納長

咲うしら花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら
伊勢大納言考氏の家はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら

よみ人

浅介して考はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら
歌しらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら

元河内新恒

梅しらと雪のあつちうんを凡のこもあつちうんを凡のこもあつちうんを凡のこも
清原元輔

雪しらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら
建も又し年後は梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしらと梅の花はしら

けり竹を柳を ちん年拾遺考序

柳をたぐみくくやあしつこころすそ月をよみ柳

徳治二年二月は訶言合ち

蘇人納言考世

うくくも程う白柳のむ人の柳とすくくまは

とくし子 中務方宗言親と

梅のむすう心床は羨うくく柳たつとせらる月をう

は皇御製

考のよめみくく羨はたきく柳やもる月よ柳のた

紅染のそこよこくくまをくつしける

中務

みね柳ようけうひ思く梅花ゆくくくや梅より

ゆ 清慎と

鶯の宿の花ゆにまこくはなまきくきりゆを

歌し子 信正編歌

むみくくくくさか柳青柳のまにまきくくく

中納言兼補

き柳のまのこくく柳うまを我考のくくくそま同く

亀と花は製

考凡中柳のくくきけつくくくくくくくくくく

百三十四年二月

入道前を改大長

ふみ娘のくに花うつくしきうへで考ゆえらうき柳の系

とくしき

後京極持政前を改大長

若河の志ひうつくしき柳のうつくしき髪をわくし

性助は親との家ゆゑ十三年

前大納言を兼

凡そうき柳の柳のうつくしきしきひいこめ若の納言

若元百三十四年二月

は下さる

白家のしきふとらうき柳のむすをにけし考ゆえ

改后をい先

前大納言ゆき家

若うき玉ゆき若にひるうきしき若ゆえ

又保三年百三十四年二月

津守國光

古柳のしきうきしき若ゆえ

堀河迄止所百三十四年二月

持中納言國信

考しきうきしき若ゆえ

元亨四年二月後宇内院より三十四年二月

付印しんを

蘇大納言考世

いひのりしきころころしゆりこの程いぬの考なりとて

鷹込極孝慎頂の履こしんを

古所門地片書

孝まうして極しんを極しんをの考なりとて

長めを

後西園寺入道蘇大納言

わりのりしきころころしゆりこの程いぬの考なりとて

物いりしきころころしゆりこの程いぬの考なりとて

し田は師

大なりしきころころしゆりこの程いぬの考なりとて

歌しんを

中院入道考世

考しんをころころしゆりこの程いぬの考なりとて

蘇大納言雅有

長しき花西に極のこころしゆりこの程いぬの考なりとて

又保百を考しんを

二品は親と考世

思ひやりしきころころしゆりこの程いぬの考なりとて

尋先を考しんを

津守國助

思ひやりしきころころしゆりこの程いぬの考なりとて

徳治二年二月に河内考世

贈与之位為子

志りねむるをふりしむじし概ぬに福はすくはありしに
すれ

花言中よ

前大納言為家

面敷がすそをらするまをれりより概は花言中よ

百三三言中よりしむじし

用白ん人夫

志りし概ぬの概言中よをりし概のすしよしむじし

宣旨門下一ふ言中よりしむじし

己

前大納言為世

笑ひしむじしむじしむじしむじしむじしむじしむじし

よふ百番言中よ

配入道前大納言

向これに花言中よりしむじしむじしむじしむじし

前大納言為世人くむじしむじしむじしむじし

よむじしむじしむじしむじしむじし

赤旗為月

是女のむじしむじしむじしむじしむじしむじし

建武二年の裏よりむじしむじしむじしむじし

よむじしむじしむじしむじしむじし

よむじしむじしむじしむじしむじしむじしむじし
前大納言為世

百三十一号より一付印一を

名大長

多岐の松のまゆりよ咲花やあつよめてらるるを
康平二年三月八日家よ花を映月とて
事と請ふけりよる光る

奈根前園白を改大長

月影の晴ゆく向ゆる桜花うこころいよみうわのわ

歌一子

柿本入丸

春日のよるに星のよも月におぬけの桜花をよみ

追赤人

長川のよさくら花を(に)かくーふり我をい

寛和二年三月らる御前の桜の花さくら

めりをけりーこころいよみうわ

こころをけりーこころいよみうわ

天唐片製

咲くしら花のよさくら花をよみうわ

歌一子

千兼威

さるねのよさくら花をよみうわ

よめ元百三十一号より一付印一を

三任隆教

ふらふら花のししくわさしとて花をまきの甲より

甲よりとてとる 左道中将義治

かろのこもねの極嘆しうとすさへ花のまは白いつ

百さうきりし時 竹尾隆贈友人

おれり江のくにまの極嘆しうとあはらうら花の白を

乙卯二年七月廿七日のまのこもねとてとる

ふらふら百さうきりし時 竹尾隆贈友人

まをよとてとる

後醍醐天皇御製

まをよとてとるのまのこもねとてとる花はあはらうら

麻人納言卷世よりとてとる者は社三十三

三の中よ 民平公為家

こよの野の花よりとてとるまをよとてとる花の白を

と花を 法下も舜

花のまのこもねとてとるまをよとてとる花の白を

建元元年二月後鳥羽院よりとてとる

宗蓮法師

こよの野の花よりとてとるまをよとてとる花の白を

麻人納言経房家より

二重花讚文

凡くわら花のあつらふはこころをいかにせよとわらふはよりの
後京花の朝夫えいこころをいかにせよとわらふはよりの
けり
白河地片歌

春こころの花やうららかに梅のつらさ人のあひこねの那
を梅のつらさをよめるしてさういふはよりの
地の女角又ちのいづく白河の花よとをりしや
事とくつとふけりよとをりしや
りけり
よみ人

さういふはよりの花のつらさをいかにせよとわらふはよりの
歌
前人は正道と云

花のつらさをいかにせよとわらふはよりの花のつらさをいかにせよ
よみ人
西園寺入道前大臣
あひこねのつらさをいかにせよとわらふはよりの
貞和二年百首言事
前人は正道と云

秋のつらさをいかにせよとわらふはよりの
よみ人
あひこねのつらさをいかにせよとわらふはよりの

新千載和歌集卷第二

春歌下

花園院は日あり甲けり侍朝観行幸
の儀を成しんとす皆おろしあはれり侍

おろしける
伏見院は歌

まにわらわの櫓よりわがわさうらな女を言

建保二年二月廿日南殿は出させ給う

殿花よりかきしとよと給うける

順徳院は歌

百あや花とびりのそとあはれ侍る春は吹

伏見院はよおましける侍りのそと

を花盛久しんかべにうぬにけり

後二位皇子

九重に白いりさけら櫓花めつれわきのいりか

し花よりかきしとよと給うける

後鳥羽院は歌

の野にまわに女を侍る系のをむのこりる色

色しける
後宇多院は歌

わらわにわらわの野やうにすし櫓より侍る白系

徳治二年三月廿四日合

正二位隆教

咲にしくゆい梅のまみしてまもゆりし世々のまを

法皇是源日吉社より七言三句合しおけり

付

法眼源永

朝日まは梅の花をわらわにれく外山の梅もまわらす

春考の中に

後皇是兼用白丸人長

吹凡よ白いそくくゆふち花のよをけりまを白毛

山家又中言りも花

弾正尹邦有親日

春凡のよかふまをといひのまを花をいふつづは

建武二年の裏よりくくをさくつづは

まをにまつまつてけり付甲しを

二品法親王定助

新くにまゆりも尾にまも梅白ひつてまを春凡のま

後醍醐院いゆまをいふまに申けり付の言合し

山家を

授人納言三羽

尋きまをいふまを同のま梅まをまをまをまを花の白毛

前大納言経房家言合し

前大納言兼宗

白毛まをいふまをいりま梅まをまをまをまをまを

百言言りまを付

後醍醐院は製

木下守をゆきしごとくつわの宿にのしげさ苑のうられ
苑のうらわきしゆみゆける中よ

二条入道前を故人に

百おのみりゆ極ちくおゆ。執る先きよとゆきつこ

守相中将ゆゆけるは禁中苑といつらまを

ゆみゆける 民をら考友

ゆら人をつこいりゆ九まのみりの苑はゆわくこと

南苑の苑ゆしきさゆゆけりおときさい

ゆまのゆゆらとあらまこあゆまのこことの

中よ官つりこらゆゆ一校ゆくとおれくるを

ゆ前よゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

後醍醐ゆゆゆ

九まゆゆゆの考ゆさくゆ苑ゆのまゆいゆゆゆし

ゆゆゆ 後京極ゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

前入納言経房ゆ家ゆゆゆ

兵部ゆ成家

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

後九条前ゆ大長

花のついでに流るついでにの山花よりとむのあけの白す
建武二年の裏より人々をこくついでに
そらうにうりついでにける花

麻持信正の雅

山花の晴る露のこぼれよこしめれぬちやや梅なるは
麻人納言には人のものしりける花のものを
とたつりていけるけれぬにちりける

言 よみ人々

いしへの者なるころよなるえつら花をいづの山花
歌 平貞文

凡吹花よりこぼれぬいやるをえとちりける

長治二年同二月中に花をよみける

持中納言國信

も折より花にうりて梅花梅の山花よりとむ

考言の中より 大炊右門右大臣

梅ちりての山花よりとむのこころなるは

麻人納言為世家よりうりていける花

こころなるは 梅は為親

咲くより山花よりとむのこころなるは
山花よりとむのこころなるは

後宇多池田製

一冊の考をうきふ金糸の苑よりわら人の心
建永六年三月廿七日

後醍醐池田製

次凡のうきふ金糸の苑よりわら人の心
苑を淡ゆり 前入納言後光

花園池田製

考凡のうきふ金糸の苑よりわら人の心
建永二年三月廿七日

付考考

後二尾家隆

梅花ちりひりき久くすわら人の心
歌 二尾成實

前入納言為兼

考研の松のふしにききふれ人の苑よりわら人の心
又保百三十七日

法下き考

白ひらひのうきふ金糸の苑よりわら人の心
前中納言雅考

吹せくら花をぬらふとぬきつゝ馬の春の風

百三十一首 前用白

うしろの春の風をぬきつゝ馬の春の風

甲一を 春の朝に

恨とくやのちの春の風をぬきつゝ馬の春の風

花易敷といふを

如法に交れ入道前の人

ちかづくは又さうの春の風をぬきつゝ馬の春の風

依然終人の心を

殷富門の人

今より花のこころをぬきつゝ馬の春の風

指人納言は花のこころをぬきつゝ馬の春の風

けりよあはけれは

藤系義孝

花をぬきつゝ馬の春の風をぬきつゝ馬の春の風

如し 指人納言は花の

花をぬきつゝ馬の春の風をぬきつゝ馬の春の風

貞治二年百三十一首

冷泉前の人

あつちの春の風をぬきつゝ馬の春の風

人交前々故人長家言今も様

前巻後巻也

昔よりかくて人とおもふ人多くあるなりよむの故
歌一編

前入納言巻世

と乃にわらわちやのこころは様おしんをむよと
は下巻

は下巻

と我の又ちしむをさうさうと花もいへ思ひ立ちし
走明きも入る前巻後巻下

津中團助女

ゆふぬきをししをのしは様花わさる方わす春は
白事にはつらむのしころとちる成花をみるひそ

は下巻

とつらむのしころとちる成花をみるひそ

中宮大夫乙宗

みよのつらむのしころとちる成花をみるひそ

為道輔也

今更は古しきしやみのつらむのしころとちる成花をみるひそ

前入納言行進

香ごのまのまよふれくせよはつらむのしころとちる成花をみるひそ

落花埋路こころをよみかへる

後徳大寺久成

ゆるさそいりなきよしくし山極ゆましくおしふ雪こゆ
京都の御息所考見に因りて病ける所
の宮サ一そうよりみくちりける中る極花
みくこのしつりまーわ我い雪こかりしと也我
こころ思ふこゆけらちりの言

よみ人しよ

木下まじりと苑の雪のこ敷くみくこのしつりまーわ
まるのつら口にいれら水も苑の敷つらこを
みくよ思ひ

中細言兼補

をぬしと女おかしちつこみすうここの苑をわつこを

正治二年百そりちりける付

直娘門院丹後

同人と極をみくちゆりし長さ別ふ苑のを那
元久二年百そりちりける

前中細言ゆき家

まよまかりるここの庭ぬれりて昔とま志賀おむるの
よま百番り合も 身々后室人更後成女
あつこりめりしと極こく考り昔の志賀の苑

歌しんん

伏見院抄巻

とりの浦やうとくろ浪と白妙に花吹丸るすむのし
高元百そら三つちりける付花

六條の人

志賀の浦や花吹丸るすむのし

歌

よみ人

春凡も高元百そら三つちりける付花

心三信の家

より野川かじらまきつわの浪つとあつとつと花吹丸

高元百番奇人

西園寺入道前を歌人

春凡も高元百そら三つちりける付花

高元百そら三つちりける付花

控申納言三雄

と西門にまきつわ浪もつとあつとつと花吹丸

高元百番奇人

源基成納言

高元百番奇人

春の橋のあつとつと後凡の吹けるを因て

あつ

蘇大僧正親源

とつとつと揚子に祝旦たつちりける

とつとつと揚子に祝旦たつちりける

とつとつと揚子に祝旦たつちりける

瓊子の親と

引しつゝのさるしゆら若もちる花を扇たけのしつゝ
はらふらふこの扇よこさ

陽子の親と

吹田より扇のたけにけりてさういふわらえとみ花
元亨三年八月十二日 後宇多院十月の又
そりあそれりあ 氏ら為後

春のよめたけやえよさじつと新とるれわ月の氣のふ

百さうりもり竹春月

入る二の親と清守

ま乃くゆやいといつと何とくもわ月の氣のふ

麻人納言為守

うさうとつとれわえのきまゝ新とるれわ月の氣のふ

六百番りあ

麻中納言ゆき家

本乃幸は日較斗を白ひまゝ花と新とるれわ月の氣のふ

歌しつ

後二重院の親

春氣ゆれり若もちる花を扇たけのしつゝ
元亨三年八月十二日 又八月十二日 又八月十二日
けりわらえよとて歌をこころとて百さうり
あつとける竹苗代 麻人納言為世

小田の苗代ありとまきこつき守りてつちを世に傳へて託

惟助法親の家は又千三三のよみはるる府

津守團助

きこりわ井ぬらきうも波越え春のつれよ啼るつれ

歌——しり

津守團助

まみしてあつれとやうとよのうらみぬや井のまきこ

百三三のよみ——付款え

前内大臣

みまうにいらむとまきこつちのたぬらふこつれしそみ

あえこ年百三三のよみわけり府印——し

後照念池前用白を数大臣

より野河とやまの流し乳やして苑とまきこつちのよま

まま百三三のよみ——前大臣の意録

まゆりみれこもわねま流しすくろふしりらるるま

親慈元年三月とまきこつちの請ちるれける府池と

まきこつちのよみとまきこつち

法皇の御歌

らまのまらみこりのねよりらららと苑とまきこつちのま

延壽御時飛香舎藤宮日流る

後京叔行朝長

後乃花凡わら西我いしこよむすいぬらうわねとせり

歌一十 一ノ人一十

春日野の夏いちろゆへにをふみかゆ人のおてこころ

建福門院

けののねるこころをきこひては春にほおのたけに

又ほ百三言ちりける付

辰二位宣子

別我ゆ春の氣は開もしてさるり敷さうめりけり

百三言めこれ一たわては言まの御三言

御書

ちりくじら花の泣こよこをいふはいりさよよこしきもの也

大納言弘實母

夏花をまじこころぬては敷さう山にこころをさるる

貞和二年百三言ちりける付

大納言卷山

根よりさるるをいづく花きのゆらるるまをまては

天徳四年の裏三言今日

中納言朝忠

花さるるをいづくまをいづくまをいづくまをいづくま

正治二年百三言ちりける付

皇太后文大夫後成

いづれもきよがたをせしむるまにわたりておぼえと教をいふ

新千載和詩集卷之三

夏哥

百首哥よりと拾げり付

花園院御製

あつらひのこころをいふまに
又ほ百首哥より拾げり付

六條の人を

くらひあつらひのこころをいふまに
百首哥より拾げり付

前大納言御取

別社あり苑ありうらの友友者のこと下社のこと
又保百三言せし付

麻人納言為守

考るるくくふわさくふるく衣力も初るれい友いふも

友の言の中は二は宣子

るれきに苑の書おし交れをくわらて友いふ

院書

付るくも笑にうらそく極考に極よこゆらるる

四月一日暮るの鳴けをうらとけけ

後醍醐院書

あひ言もくふらと社終つこめ思ひわくわ暮る

ゆくうらとけけ

後京極院

あこわちりや月乃くふの竹もこ社下因一の初者らる

歌

仁和寺二は親と守是

付島や苑らよわとらひてをよとくわ月々鳴る

二十三日半は里竹もくわめをうら

けけ

は里竹書

りしやと里あれもそつと付もや苑らよとらうら

又保百三言せし付

後光朝照所前園はた下

お川の里は花子のや花にまきくね浪のちもくしうら
よ元百さうりけりけり付知花

今お川前右人長

夕月東光さうくくお川の里はまきくしうけりお花
詠しう

讀人しう

久この月の氣もみゆらしかつこの里はまきけりお花
中務マ宗さ親

月やしと夜氣のことおくのやむしのみしうの月
藤系雅宗納長と兼仗にさえはけり付鳥

つとをゆけり

前中納言雅孝

こころゆきつとをきけりおのまきくね浪のちもくしうら
正治二年百さうりけり付

前中納言定家

お川の里は草花ゆきよあおのちもくしうら付鳥に
貞和二年百さうりけり付

等持所贈た久た

秋の里は下草ゆきあつと秋はくしうら付鳥に
百さうりけり付

進子の親

おのちもくしうら付鳥に秋はくしうら付鳥に
おのちもくしうら付鳥に秋はくしうら付鳥に

時^{子規}もるるにさつしののちひまのくさひすぢをささげ

津の國古書部といふ所へは依けるは都宮

人よ申つるはる 能因法師

暮らつておぼえを聞くとわがまのやにさうは

歌——寸 惟明親王

休つたお若やんはあつたさう都まつさへりたり

中細言家持

引つてはよめく鳴をきつてはつとほよきくうい

野まんなん

は里母さう——く^あのくに言はるるさうと

又保百さうりちりける分

後照会院用白を致人長

鳴りく後おつ——は——すをきくは福言ら

前久細言考世よりと依ける春日社三十さう

の中々 法眼行辨

あしひくはるひわれは——は——は——都の人さう

後宇めは南禅地よりま——ちりけるは

都さういふ事を歌すくさりを^まさけるは

に——は——は—— 元感法師

あしひくはるひわれは——は——は——

後醍醐院いままこみこらまご申ける所人々
をさくつとて百三三うらみおけるも甲一と

持中御言具行

かよひくらんわつそや時をゆらう極のそまきし
元亨四年正月後宇治院より三言請とて
けしにわそんてをさくつとて百三三うら
ゆつとける所を同報とて

民平右衛門

竹^{たけ}を^のの^いに^くは^思ひ^てし^てを^しら^ふと^して^し初^言を^らは^し
入道二品親王性助

か^つた^りと^して^し初^言を^らは^し

正治二年百三三うらみける所

前入道言隆房

きつにやとて人わしに時をさくつとて百三三
人傳報とてしらふとて

平春時朝長

時^{とき}鳥^{とり}人^にけ^るの^との^と同^くは^し身^の扱^るね^は承^りう^るは
中務^{なかつ}宗^{むね}言^の親^と家^の百^三三^うら^み。

正三位重氏

ま^つと^して^し初^言を^らは^し

元亨三年九月盡日の裏よりみりきり後
きりけりしにめでし人々をこくつとつ
るゆにアける。月前竹を

麻大納言實教

清くあつにくさけりしす又あまの月をよめり
百さすの申す 花園池女御

結いにあつるの月。執事おし初書とて下しぬ
き執事こりし事とて先

光明寺に入る麻大納言

引くは伊勢のよとわしつにけりしあまの

麻大納言為世よりと休けり春日社の言有
に因竹をを 祝部成久

とふこととて下りたけりしひすてしとて
惟助は親の家又やそつ

麻大納言雅有

いづの言を御しつに
永承六年殿上言合し

六条右大臣

うらぬ言もあしりしすしけりし又と
夏三つの中し 麻大納言桓守

黒川子にうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

平維良朝臣

とくしにうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

民平朝臣

あはれにうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

高元二年百三十九年十月一日

藤原朝臣

あはれにうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

高元二年百三十九年十月一日

藤原朝臣

あはれにうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

高元二年百三十九年十月一日

藤原朝臣

あはれにうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

高元二年百三十九年十月一日

藤原朝臣

あはれにうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

高元二年百三十九年十月一日

藤原朝臣

あはれにうらみしむる我内をいつて人の甲に寝るよ

高元二年百三十九年十月一日

藤原朝臣

延和二年六月廿一日
延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

延和二年六月廿一日

神多れし昔の政に思ひこもりそめれ階の形おめらむ
入道前左大臣

神多れしちるる留りゆのみことまきけりし言ひこもむ
建武二年の裏まきりし言をこくつてし
つづつとつにけりし時橋を

入道前内大臣

さうまけよしふま花も言わし昔よりつらもおれを
貞和二年百とつとつとつ

後三条前内大臣

昔成りて昔に人れ家の何吹つてつとつとつ

歌——寸

後白河地侍

まらぬ花のやまらぬ郭よりれりし今も昔より
守是は親王家又やまら

前中納言守家

歌——寸

平忠盛納言

関ふしよまらりしとけりし所をみたりし物ありしに

前大納言為兼

今つや関わりやつとつとつとつ

順徳院侍

又月るすわのたまきりしつる月のかつゝの氣まじり
馬のあし又あしと孰るおのわやりの又月るまき

信正編昭

又月るにたこれく人をあつて交ぬるをさかへり
よみ人

りこくもわあつ又月るのにれくさくさくさくさく
百さうきり一付又月る

入道親と是巻

又月るさうさくさくさくさくさくさくさくさく
甲一を
中教つて宗を親と

あめこよみりこいり交ぬるまふとさくさく
内院抄の家百さうきり

源朝門地抄

又月るさくさくさくさくさくさくさくさく
又保二年百さうきりけり

志後利地地兼用白内人

あつゆら地地さくさくさくさくさくさくさく
よ又百さうきりあつ 古止門の内人

にわつ井つつあつあつあつあつあつあつあつ
藤原基に

流河のまゝ葉とみす成をまつまの清は又月面の比

亦僅正の朝

測いまはらうし回一わすりぬぬつ傍やう又月面比

指中細言の雄

又月面比ら田うらちり北島川いに測せの又らうし

建武二年の裏うくく歌をこころうし

ふらうしにうまにうけける付又月面

前中細言の條

あつとめむらうらうとまの如き河原よるれから又月面

百さうしむらうし付甲一を

名人

又月面に河言しめく成をまつと休みこのまらうの

正治二年百さうしむらうし付

藤原隆信朝臣

さみとれおしにきてと柄とて浪をむらうし後河川

百さうしむらうし付甲一

赤澤雅純

久このまの浪をす庵の上の舟のよらうとれのは

赤元百さうしむらうし付甲一又月面

藤原隆信道長

又月毎に...の銀河...
元亨三年八月十日...
あては五月

いづれ...の月...
百...
子規

入道前を故人と

時鳥...
時鳥...
月

前人の言を告げ

あつ...
あつ...

乞...
律の園助

...
後中...
後中...

持中...
持中...

...
...
...

伏見...
伏見...

...
...
...

百三十一のちりー付言

大納言取實女

移うてゐるゆゑに言下思ひきく人の庵の別し女を
と見え百三十一のちりー付言

後宇多院止書

よら走る別しうみゆらあつてゐるまじき別し女を

と見え

漢字門記抄

水部よその思ひをにみつてあつてゐる別し女を
康永四年六月に河よりと見えう海よりあつて
付水部言こしよまをにみつてあつてゐる

持大納言實女

前二一一人の思ひを海よりと見えう海よりあつて

と見え

漢字門記抄

あつてゐる思ひの續取らうと見えう海よりあつて

昭訓門記抄

草よりと見えうと見えうと見えうと見えうと見えう

百三十一のちりー付言

左と中右義抄

交草のしと見えうと見えうと見えうと見えうと見えう
と見えうと見えうと見えうと見えうと見えうと見えう

よみ人しす

常夏の花ありきかしの植ふを人かめしむし

又保百三言ちりける付

三条入道藤原公成

里の海よりつりしつらうらひ舟星の川流のつらうら

歌しす

徹在門地

しあしくよ河の浪の言文くらんかき海しつらうら

惟助は親の家又すそ言ふ

藤原納言為氏

大井河しつらうらつらうらつらうらつらうらつらうら

又保百三言ちりける付

藤原納言為世

大川せぬみせり月の花を結つえくやく切らみし

樹陰夏月こえしをよりと行ける

伏見院少輔

久しおそのいにくの乳をくまね君ふりみし月

嘉元三年伏見院こえしをよりと行ける

後照合院園白人政大長

つらうらつらうらつらうらつらうらつらうらつらうら

元亨三年八月十二日長後院よりつらうらつらうら

うせりけり付月一を

麻人納言為世

月やささくさくよ物つて交わよ入し去る月のおの

百もあまの付 二おは親とさ亂

由美の物のこゝらひかへしと月のこゝらと月ひとは

路々まきと 為道納言

いづくにさりすくえき物ののりら路のこゝらまきのえ

後醍醐天皇御去若所ははけりまきを^{つら}行くと

いづまらけり付々まき

平氏村

ちり秋のさしうこもるけさくも秋のあやうまを

百もあまの付 細涼

南白丸大丸

交りつと涼しくぬらぬ蝉の羽ひののねり下凡

又水田年の裏涼うかす禁中佳話といふ

まきと 二はれ家

九童のをは是所か何と信くすしとあつとや

歌 一人丸

あふのささくさくまきとあつとる極信水あつと

中務

ちくちく水に煙うがふしじきふ泉のゆきとて

祝部行親

山城の井の下おひささきとて孫ふとわね玉川の氷

麻中納言直房家^のうたひ納涼

よみ人しし

大井河まこと交ふし後しつゝいひさきよ旗やせりて

歌しし

伏見尾止製

あつしつゝの浪の志しつゝきんふりさるゝ縁よのよは

元弘三年之后曰人屏凡々六月後すゝ所

後田志比前用白丸大長

止後川流る流るうにするありあゝお都のあつしつゝ

又保百々うちりし

前人納言為守

みうしつゝいふなるそ人おののいふしつゝも

寛治二年百々うちりける局六月後

皇太后夫人史後成女

止後すゝわさくまのあつしつゝ

人のうたひを

新千載和舞集卷第一

煇哥上

煇ふにのりんとおうけら

延喜御製

ちくちく有へりをれ煇ふわし疾ふは言ふまふ

隆平御製

はらへる水とまうらうと雲の二たふらぬ煇うけら

有るまのまうらうと雲とけけるは哥

の中にもはらぬのまうらう

延喜御製

ちくちくはらぬは言ふまふ

正和元年八月十八日又まうらう諸とけけるは哥

煇朝まうらうと雲とけける

後伏見御製

今朝のまうらうは言ふまふ

まうらうと雲とけける

朝のまうらうは言ふまふ

石清水社にまうらうと雲とけける

正和元年御製

あまのまうらう朝けのまうらうは言ふまふ

夕房こいつら半そ 夜笠前の人長

わくわくは娘の夕の白房にうの袖ふらとりまらりめら

是貞親と家言合ふ

新恒

よむくは娘の草葉にそく原に到りわくわくは我が清つ

歌

中納言家持

白房にけをきあつし清つしてわくわくはそく原にわくわ

雪村好忠

ゆめげらまよわくわくは娘の草葉あつしけり白房

建永二年の裏まらりてをそく原にわくわく

言ひつら内につけり白房

弾正尹邦有親と

あしきよ下車み我が極麻のおしけりわくわくはそく原

娘の言の中よ

ほ三位友子

吹揚ふ凡らちやえらそわくわくはそく原の娘は白房

百そ言もり付萩 兼人納言若守

そく原の娘はそく原の娘はそく原の娘はそく原

歌

後京極持政兼人長

あつしけりの萩はそく原の娘はそく原の娘はそく原

百そ言もり付萩 兼人長

吾ぬにらむのむらに成とて扇はうきをた秋系

持中納言ゆき秋物(ゆりりけら道五門の前を

らそりしちり秋の糸を結くむけれらひつと

しけら 久戴三尾

た成さうとすを結く秋のくちきとさるし人の心(七)

秋 一人納言賢名

りやね洞の春の秋うへく物思小袖の故は夏はけき

貞和二年七月七日之ころ言海とけけり付七

夕秋久こつとをよとけけり

は白止書

娘をゆいさのころにきりれに秋つとを結わかすの橋

秋 後伏見所止書

秋つとら後日いきと月りさくふのこがうとつとふの橋

元徳二年七月七日裏もく三ころ言海とけ

けり付七夕橋こりふしをにりむにけり

持中納言の條

逢きやふととらとら夕月秋走とふかつと橋

七夕秋をさる 康も風道

銀河^{天の川}秋を結つと言のこやとら言紅糸の結しるるは

百ころ言くしまたつと付七夕

入道前々改人氏

三子一人の向の座の座を成く玉のをこのよのまきへ
元亨元年九月廿六日龜山後よりく人のま
こも歌をこらうとく言にうむにけけらあ
ては甲一人をよととけけら

後宇あはれお歌

七夕増女はれく又わらうみし娘の七の月やこにけけ
歌——す 大納言経院

天京ちりさけみれは七夕のりの中してよの身まらこ

中納言家持

天乃けらちりくちいらうらこも人志れすこ思ひうら

紀友則

わよの川をうらみを後つかわる境に泪も袖におれけ

元徳二年七月七日七そう障とれける射七
夕草こらちちをよととけけ

花園はれお歌

更わらうらを草ゆらちひと強く成ね天志川は
七夕歌

天けらくは身の中こちよ喜ひくあ今いつ
歌——ん 九条大吏歌補

七夕のわよぶ志は今宵よはなれば凡そく月かよふまゝ
文保二年七月七日の裏にゆくは言合はけり
付七夕地祇こころしき

民かたを憂

天川うねあときりしとわよぶとくもわよぶとく
文永八年七月七日白川あまのく人々をさく
あまのくにうねりしけりわよぶ七夕橋

後漢新地は繁

かきくみするわよぶとく天河わよぶとく
七夕の心を
後西園寺入道前太政大臣

河をわよぶの河波きつと後のわよぶとく

正平二年百三十一のちりけり

兼大納言行継

銀川ニハナ一夫のわよぶとく

歌一

後伏見地は繁

七夕のわよぶとく衣あはれよめく
麻中納言冬定

七夕の又十橋一夫とく
正平三年の裏にゆく七夕の清きとく

正平三年の裏にゆく七夕の清きとく

七夕の夜のや一更かきほくろくろ月日ふ
又ほ百もあぢりけり
は下しき巻

いぬいづして思ひや留るるしほの糸のけいぶがけ

正徳三年七月七日七言三句あけけりあてよふ月

とほりけり
後二巻此巻

別れよるよみとこめす夕月欠曉すものりあひのそ

歌一十
和歌七部

ろしほ結とすくはと傳よはぬのろめせりやふ

延和六年七月七日五言五句あてよふ月

讀人

別れよるよみとこめす夕月欠曉すものりあひのそ

賀茂祐よみとこめす夕月欠曉すものりあひのそ

源兼成納長

唐柳よる朝の糸の花よるよみとこめす夕月欠曉すものりあひのそ

嘉元百もあぢりけりあてよふ月

昭慶門地一巻

吹しよる野へのお花の娘は唐のよみとこめす夕月欠曉すものりあひのそ

し里はほほけりあてよふ月の許よる唐の娘のよみとこ

かいとよるあてよふ月の許よる唐の娘のよみとこ

浦仁親

坂凡も尾花流にまつる宿うし里ふるとも扇をりけり

歌一十寸

式部恒明親

凡もあつては春のあきまに月乳の御衣草と志里

貞和百三すちりけり

藤中細言雅孝

海芽生のそのの糸をけり扇をさしと鶴あきり

歌一十寸

先道朝長

うよかぐよ袖下とては夕小洞わらふ娘の

道法法師

夕小洞にうしわ扇をけり娘のわらひは

法下定長

扇やうふ思ひかゆまつる袖の洞うそわ娘の夕言

後田克成藤原白丸長

うりけりあつては夕小洞わらひは娘のわらひ

貞和百三すちりけり

藤中細言雅孝

いとちあ思ひはうれをりけりまじうそわ娘の夕言

は母百三すちりけり

二尺は親と芝助

馬鹿すくむとて一三音の志はむきらの故はむ言

永仁元年 龜山殿の又さう今よ野ぬ故凡

後苑山院は人だ

とるの鳥のふのなうおるむと志の上吹まぐ故はむ凡

歌

麻中納言有忠

いよきしむけいこえとるあさふあさふ故はむ言

百三言もゆりし時故夕

さるは親と

何ふむげく方とらつ思ひくしむけいこえとるあさふ故はむ言

故のうの中

指中納言三雄

表一うつらむらむ言を故のやいひ思ひくらた

後よかりしゆけり何そく野人所のなめい

とこの野にけりし故の草りしとねん

ひりりよとねけり 朱雀池は歌

年一し日人又人のくろ野人の故のさしや花とらるし

後苑山院は歌

後苑山院は歌

高志めく今こやをに成もむれとのあへぬ故はむ言

百三言もゆりし時 持人納言實俊

何れくろ神もそしむけいこえとるあさふ故はむ言

貞元百三十九年七月一日

贈長之尾為子

娘凡よるこれよなりをみらぬこの思ふはわらわ疾く花
元弘三年三月廿四日屏凡よ

麻人納言実教

いく度りよりききし文様のゆい古枝の娘疾のりよ

建武二年四月裏よりく人へ送をこころこよ

こころにけりゆにけり付娘植物

彈正甲邦有親

あふりけりこむか文様のゆいわらの疾よ娘凡が

貞和二年百三十九年七月一日

左兵衛督兼義

あふりけりけり娘凡よるこれくゆら花の疾

歌一十 麻中納言良房

あふりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

廣義門院

あふりけりけり難の朝りよききけりゆら花の疾

元亨三年七月内裏よりく人のあこころこ

こころにけりけりけりけりけりけりけりけりけり

後山守兼良人

胡しよのふら道はあつりよなるは白く火のしよ
野草花のしよをしよをしよ

大納言師賢

白雲のふくこみしよと雲花のふくしよは野草花

寛和元年八月十日の裏の合しよ

夏永惟成

うしよ行しよとやえ火ののたつ下しよはけしよ

建保六年九月十三日の裏のしよはけしよ

煇野月しよしよをしよをしよ

順世徳也

若草のころと真葉のころしよは野草のしよ

建治二年九月十三日の裏のしよはけしよ

おまけのしよしよをしよ

後西園寺入道前左大臣

是のころのしよはけしよをしよ

元亨三年後宇治のしよはけしよ

けしよのしよ 民部卿

是のころのしよはけしよをしよ

暦應三年八月十三日の裏のしよはけしよ

月出のしよしよをしよ

伏見所抄

元亨三年七月廿七日

元亨三年七月廿七日

伏見所抄

元亨三年七月廿七日

元亨三年七月廿七日

元亨三年七月廿七日

伏見所抄

元亨三年七月廿七日

元亨三年七月廿七日

元亨三年七月廿七日

伏見所抄

元亨三年七月廿七日

伏見所抄

元亨三年七月廿七日

伏見所抄

元亨三年七月廿七日

元亨三年七月廿七日

伏見所抄

元亨三年七月廿七日

指中納言仲定の家如寄金4月

大藏卿行宗

平徳^三くみつと色よし月や夫はよしめの鏡らる
建永二年八月十五和色好敷よし他上月とい
つらしきを薄きしけりよしにうほにけり

冷泉前々及人氏

池水はゆきよの鏡敷らんよしちりせくよしわぬよし
同日幸八月十五和色池洞よし上月とし
を薄きしけりよしにうほにけり

前大納言為家

月
池水はゆきよの鏡敷らんよしちりせくよしわぬよし
馬亭如寄らるよしとゆしけり

花園池水如寄

いづみやせし井いせく高に和色敷らるよし月
百三十一日付月 前大納言為家

天京すめらいせし成よけらしりよし月の鏡よし
赤元百三十一日けりよしとゆしけり

後宇多池水如寄

娘のせしわらひよし月をわらひよし我世を照すよし
記し

後醍醐池水如寄

わさしけよみくしの故月とにちつる宿まりのあまうぶ
中宮権亮よ依ける以禁中月こしつらんをよ
めら
為道朝卜

いっせし世よと云れ九言の故よま井ふらう月を
後上ゆらとれこうけら此月のくゆま依ける
をみく
ふ事入貳重家

常らと月之走よけこいせつとよく云いなるゆき
歌しし子
源基氏朝長

ほららいくこのそつとつとつそのとら月をらう人共
ゆふさうしひて月をみくくもえら

源三忠朝長

言やしとがたりわしそのよら新づつこよ梅のよ月
娘の言の中よ
京極前園白家肥後

うらわらうらうわら娘おと月之走らけり
寛元三年九月十三日西恩ち入る麻を政人長
真木嶋にありく月十三日三つよふ依ける時
常盤井入道麻を政人長

ちよよを社ねよ明わし徳人のいひありら娘の月を
ら中二年百きうせりける時
後照念此園白を政人長

更わたりておとけりてあまの娘はなつとてあまの月を

百きうきり付月 指中納言為明

吹くは娘のわらわはくじへは凡ふとあまの月を

前中納言定實家の跡うへるは居月也

りふきと 前中納言季雄

あくらふ水くしのは娘凡もわけて梢の月うらわ

永仁元年後宇多院ふすきりけり付娘

凡こころを娘をけりてにうまにけり

津守國助

あくらふ水くしのは娘凡もわけて梢の月うらわ

歌 津守國助

月きよきりては娘凡もわけて梢の月うらわ

前中納言實起

あくらふ水くしのは娘凡もわけて梢の月うらわ

龜山院少輔

あくらふ水くしのは娘凡もわけて梢の月うらわ

順徳院少輔

あくらふ水くしのは娘凡もわけて梢の月うらわ

月麻松凡こころを

前中納言為實

吹ら〜云同月わ〜れく付留〜留〜人等の様凡
月麻竹凡と
後鳥羽院文ゆ々

多〜世行の葉〜く月〜てに〜お香〜〜
前信正道性

世行の葉〜の葉〜く月〜てに〜お香〜〜
久世百〜
皇々后官人丈後成

娘の月又〜わい〜く〜く〜く〜く〜
嘉元二年八月廿又良後宇多院月十月三日等

清き〜れ〜付
前入納言為世
わ〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜

花園院持明院久に〜く〜く〜く〜く〜
此月〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜
〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜
成よ〜け〜れ〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

吟泉

ち〜成〜さ〜ら〜に〜さ〜ら〜い〜す〜け〜ら〜き〜の〜葉〜わ〜く〜れ〜出〜月〜を〜
百〜さ〜う〜
月を〜く〜わ〜の〜わ〜の〜娘〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

前入信正道性
け〜の〜付〜印〜
源画氏朝長

いふにわたりておのれをいふにわたりて

百三十九年十一月 入道前を改めたる

娘の月を先すしてし事はにわたりてつらうにわたりて

前大納言経成

とらうにわたりての月を先すしてし事はにわたりて

百三十九年十一月 入道前を改めたる

神をいふにわたりての月を先すしてし事はにわたりて

百三十九年十一月 入道前を改めたる

後大納言経成

は青糸をいふにわたりての月を先すしてし事はにわたりて

百三十九年八月廿二日 入道前を改めたる

百三十九年八月廿二日 入道前を改めたる

とらうにわたりての月を先すしてし事はにわたりて

百三十九年八月廿二日 入道前を改めたる

共娘の月を先すしてし事はにわたりて

百三十九年八月廿二日 入道前を改めたる

百三十九年八月廿二日 入道前を改めたる

百三十九年八月廿二日 入道前を改めたる

ふとらうにわたりての月を先すしてし事はにわたりて

後大納言経成

末書しよくつたあふ乳みらえ野へ三月に返りしり乳
亥治百三言ちりけり付野月

野月記

しう野下草いみるくをくあよまらるりちり月を野

記

後二位氏久

同くしよくつたあふ乳みらえ野へ三月に返りしり乳

平宣付朝長

うつぬのも枕をきく娘はよををぬく月をうらりふ

丹波尚長朝長

いねくし月をみくし中娘はあきしよくつたあふ乳

よみ人

天け月のち舟いんんくちを甲の波治のよの娘は

亥治百三言ちりけり付野月

後二位行家

泉川に浪のちみくし志にくしよくつたあふ乳

亥治百三言ちりけり付野月

贈後二位為子

約しけり何れよしにり乳あしうくはるる娘のあ

元亨三年八月十又史後宇む沈よ月卒

ちりけり付野月 前大納言為世

舟の波のたぎりに波のよりの波のよりの波

中務卿宗室の親と家言今

亦亦漢義情

舞乃よの月のあつたつたにるるをわくは波の言ハ

又永七年八月又良由裏あつたつたの海月

ふ今又道前を改大也

之波の先のわくわくの浦凡の吹らよすあつたよの月

百の言のつたつたの月

た道中待義於

伊後の海は波のつたつたの月の氣を清くするは氣

亦大納言為氏すつたつたの津嶋社こそ

言今よのつたつたの月 源親も納氏

玉の嶋やつたつたの氣をつたつたの波の板のつた

歌 つたつたの月 津も國量

やつたのつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

ほ二位好家

わまの浦のつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

伏見のつたつた

かつたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

つたつたのつたつたのつたつたのつたつたのつたつた

西園寺入道麻呂の御歌

和田赤月みりしらのさやゆよまきうあまうらよむ家浪
あえ百もうまかりける母

万葉門記

らるりる島はまかたの月の影をうりくくく海

歌しん

津も風道

んわくすめの用もうらと祈しんくくく月の影

はさぬ助

伯耆のわさく氷も乳みれえいぐ月と草かくれに

源信明朝長

坂のよの湯この月みれえいぐ月と草かくれに

人丸

天の赤しんくくくくくくくくくくくくくくくく

伊勢

いふれあも成りく月影のこまぐくあも些りか

和言所言今も海邊月を

後多岐代止歌

わらわりのらんらんあしはら松浦の沖のつちの月

後醍醐院いさこみくあまこしんけり分又そり

今も月を

体辰考親

そらたへくおろくみわらうに海流を渡つた月をくふ
あ光百々言もりける竹月

前人納言為世

馬我下し流よりこゆる月歌也

清みう用ひる月のを

新小載和歌集卷弟又

娘哥ト

歌——子

よみ人——と

おしつうのやうな娘のほえらうと始て長そ良法と

後二条院止歌

娘凡と良きくは吹ねまき一乃妻うら秋ねむや嘆ら

古きうのうまきうらうらと流ける竹笑白く

らこいふと

伏見院止歌

今よりや笑白くし掉麻のおま図をの娘歌の花

娘止哥。中目

後伏見院止歌

麻の子と喜望子の類の花神よりいへる人
貞和二年百三十一の年

麻久納言の蔭

娘の花ちる凡乃さむしきよしへこう麻と妻並し

後之系麻内大長

衣すうの麻の妻こひも草やうしこの衣すう

貞和二年の事

後流我流片歌

因人の袖と扇をうすく衣妻をひもかく掉麻の馬

又保三年百三十一の年

麻久納言為世

うみとひたの路へのおまをうすくお妻こひも麻の鳴り

歌

持人納言の明

し島のまの月のみすうみ面歌をうすく麻の鳴り

津守團助すうめはけら信言社うまよき同

麻のこころ

信言社

松凡のめらうとよはをうすくおまをうすくは麻の

娘身中に

鎌倉右人長

夕まの身まうすくをうすくは麻の鳴り

祝部成團

掉麻のまのうすくは野の妻をうすくは麻の鳴り

文保三年百三十九丁ありけり

夫後利花院前園口の事

くはむと喜ぶべしとて身もくさくたふす廉の鳴也

歌——寸

常盤井入道前を以て

坂といひ鳴りしつものにはまうすこの林もなうけり

建保二年坂中又三十九丁あり

信正行意

くはむと喜ぶべしとて身もくさくたふす廉の鳴也

元弘三年之后屏凡は田家のふこつとも廉

めてしる所

指中納言為明

坂の田のわくの事なりとて地よりむとわす廉うけり

よ又百番三十九丁あり 後京極坊及前を以て

いふはる事なりとて田のわくの事なりとて地よりむとわす廉うけり

歌——寸

天台座主桓盛

唐より田のわくの事なりとて地よりむとわす廉うけり

大江高廣

坂といひ喜ぶべしとて身もくさくたふす廉の鳴也

前大納言為重

し田よりわくの事なりとて地よりむとわす廉うけり

百三十九丁あり 坂田

前大納言為守

井の口田圃のふちみほりて居候御事
又候百三言申けり付候言

前大納言後光

凡そ御座のまに申し候て田圃の月比敷うらまは
建永元年八月廿四日とて書道初居り
申す

前大納言為氏

我々の田圃のまに申し候て御座のまに申し候
言

贈に之位為子

あつちの御事とて申候御事とて申候御事とて申候御事

元亨三年之后屏凡より

二小は親王意旨

長らく申候御事とて申候御事とて申候御事

永仁元年八月廿又申候御事とて申候御事

申けり付候言 為道初光

さういふ御事とて申候御事とて申候御事

後駈駒院いさよみとて申候御事とて申候御事

合よ夕初居 前中納言隆也

月を西に夕の御事とて申候御事とて申候御事

坂言の中よ 藤原雅成

このむら朝をいかにさしけり今やききし衣の金
し階入道前久人氏家千三の男をいひ
申を流しにけり

三条入道久人氏

切りのすわのなる洞平りいれは是れ家の名けり

歌 人江宗秀

鳴かす娘のいそめ申おと柳の名も流る方を

水福門院

流しけり車坐のいおまえとておの申おまえ

貞和二年百三十九のれい付

兵部隆朝

わこよあをを洞よりか中の思ひこたて申や鳴り

前入納言為世よりとけり申中を申を

は下隆朝

蓬生は家のやうを流しとて人申を鳴り

歌 前用白久人氏

流してこいれお家のい芽生とていれはるお申を

中務宗三親王

いよりいれいれいれいれいれいれいれいれいれ

申お申敬枯いれいれいれいれいれいれいれ

伏見御所

初春のさくづき暮し〜みよのねのまじり世のしづか
〜
後西園寺入令麻呂殿

春のけのまき暮しのきりくすいしづかおの恨ちりし
進子の親王

梅のころよとむしりも春も花ちり〜おの国ゆり
藤原光俊朝を位吉祐〜く〜も二十とこ
のきり〜とけり

〜
ほ二位殿氏

きり〜すおのりりゆいし弟せぬの志の京娘〜
か

曉月園中〜し〜ち〜を〜

麻人納言為世

虫の春と春のや〜し〜恨じり野もこの月お有明の
嘉元二年後宇多院の百三言けり月

正二位隆教

明や〜ねも月おの娘凡も初春さ〜く〜く〜月を
元亨三年八月十九日又八月十九日言けり

付 民部卿為家

娘や〜の凡言〜し〜し〜月の親う〜
文永二年九月十三日又八月十九日言けり

月を

と階入道前九久長

久望の天てく月のかく川娘のこしはあまのあつ

赤元由裏百さうりまけら付眺らるを

後照念所国白く改人長

有月の月い波月み乳みくして海月さ成し浪流志まら

百後月さるさそ 皇々后宮と更後成

吹らるあさく凡よ手暗さるさくさる有月の

ふ又百番さるさ。 赤瀬雅行

かくさやさ向のささよ手暗てかすつりさ有月の

元亨三年九月盡日し裏ささうり月を

藤中納言季雄

おを田川波芽のなる彩文く和さじさち也有月の

家上月ささうりさくさけらる

後京極持政藤太政大臣

七月有月の月の明くさく我月の人さるさく

厚心尹那有親王家ささうりさくさ持衣

頃河法師

娘よひるれ向らさひくみさくさくさくさくさく

赤元百さうりまけら付眺らるを

昭慶門院一条

難波人へのひょうと男をこやし衣文てし衣のふ

前中納言為相すめゆける麻鳩社十二三

の中よ 平舟付

浦浪に列てしかくし星のわまのいよはすまの衣のふ

海鳥揚衣を流る 後宗宗泰

まゝかくし袖のうしはさげれがまもわを衣うて

歌しづか 為道納礼

付凡の衣まらふしうら子とて月を望すほの思人

西上の草の春うくしうら

蓮生法師

月影の板よりさしにぬわしとぬれうらと毒のこ衣

弘治元年百三十一のうけり

林宗は資平

こひうらをさすて七月の月よりこい衣のふ

揚衣をうらうら 法永法師

まろらそのし儀事の初衣より衣とすし衣のふ

持信の良衣

し賤の衣こい板の衣のわさるうらと衣のふ

承久元年の裏うらふ同揚衣こい

後久我古改人

ちよりのまはらうとまらうはなれんまらうのま
あ元百まらうのま

万歳門也

よらう同まらうのまらうのまらうのまらうのま
は下是懐

のらうのまらうのまらうのまらうのまらうのま

治暦元年九月家まらうのまらうのまらうのま

清くはけらう
まらうのまらう

おらうのまらうのまらうのまらうのまらうのま

元亨元年九月のまらうのまらうのまらうのま

まらうのまらうのまらうのまらうのまらうのま

民平のまらう

まらうのまらうのまらうのまらうのまらうのま

百まらうのまらうのまらうのまらうのまらうのま

麻園白

まらうのまらうのまらうのまらうのまらうのま

元亨元年九月書日考まらうのまらうのまらうのま

元亨元年九月書日考まらうのまらうのまらうのま

元亨元年九月書日考まらうのまらうのまらうのま

元亨元年九月書日考まらうのまらうのまらうのま

きりけり舟身同嶋月こりくくをにり
西川つらんら 麻人納言實教

きりしおのり舟の娘まよに新しき有明の月
百さうりけりわがては坂田しんまを後ま
おしけり 後二条院止観

月掛ら門田の面おきくこ舟のりり各略る
歌しんす 麻中納言定賢

高橋はら水と舟にさしをとの掛ら娘の川波
社司こし本社めく名所又さう後か
付字洛川を 祝戸成賢

かこしおれもさし河川お娘のよこにうらの橋水
永に元年八月十二日後宇くおれおすさう海を
らおらうお娘浦 后二位隆光

おちい多にとさるわに海お娘を波の娘を海に
百さうりけり麻 入道親王光景

娘凡もわけておきおしそよく度同に掛麻の多
歌しんす 中務卿具平親王

麻のよむおのり海の下紫より枯れ野へも表さうら
人丸

佐吉の喜里のりお娘もすれら衣のこりわら

康保二年の裏より今の所一畝の人の世をな
おしり給てわさるれいのおまゝのこゝろ
鳩をにらしてまぶらふはまはくさくのまは
らふ書にまらうけり

よみ人

いづこかの花のたよりをきくは
と元又十年十月と東門のうへま

植てらるいと有るを月をまらうけり
けまのまらうけりまらうけり

かうまらうけりまらうけり

弘長七年九月九日亀の尻の羅の
しんまを種まらうけり
まらうけり

ゆめゆめ羅の羅のまらうけり
前人の言を為

ゆめゆめ羅のまらうけり
又保二年百まらうけり

前中納言實仁

ゆめゆめ羅のまらうけり
を月まらうけり

三つよりとぬけけり

後宇多院御製

七月やまのの坂のしほり昔にめくはきくはさうら
寛治元年女御入口屏風よと陽宮の所

宇都井入の麻を久人

九月にふくまのまのしほりのまのしほりのまのしほりの
はま七年九月九の亀の所よと羅の所
しほりのまのしほりのまのしほりのまのしほりの
申ける竹のしほりのまのしほりの

伏見院御製

嘆白の草のゆきまのたのまのたのまのたのまのたのまの

式

式乾門の所

みるゆきまのたのまのたのまのたのまのたのまのたのまの

麻右衛門の所

竹のゆきまのたのまのたのまのたのまのたのまのたのまの

麻入の所

初花のゆきまのたのまのたのまのたのまのたのまのたのまの

式

花のゆきまのたのまのたのまのたのまのたのまのたのまの
終末の所

徳久もたふた

くじを乃よりごまかすおまじ切をいじりて事ありしを

娘のうの中に 指入納書る也

娘はよきくよりたわらむましよりしむる福

水福門地

まのりららの下まをいしよくく言に廉もくや

貞和二年百三十九年

入道二お親とはち

七月の末野のり萩原殿へ娘はしむるより

源頼貞

わらしきおまじのいあかき果てまおまお梅屋の

拙家使らぬ

ろと梅守の田の倉のむしをわらふ今く庚三月十七日

は下事情

そくは守娘のうらみのむしとてしむるのむし

二おは親と寛き

落しにまにくらの下紅糸付て後と思ひしや

祐子の親と字落しとゆりけり日やん

字落入道兼国日合久大

のをまじよりのおまじらうに其にのやけこの娘

身

三十一

水福門院

坂身のしりくらしき後嗣よりと世にたぐふことありてのよし

源重光

初孫のうめわらふこと紅糸ありてのよしを後嗣にたぐふ

おとし

おしちるふ又のうらみことなむく人のやわぬは

貞和二年百三十九年これ

中宮大妻宗母

おれのふらふとむらふことありてのよしを後嗣にたぐふ

弘長二年後漢義隆より

付紅糸を

前大納言為家

紅糸よりよむことありてのよしを後嗣にたぐふ

三十一

己の地前持政人氏

おとしのしりくらしき後嗣のよしを後嗣にたぐふ

建長二年より紅糸をくつてのよしを後嗣にたぐふ

につとける付坂持ゆ

後醍醐天皇

おとしのしりくらしき後嗣のよしを後嗣にたぐふ

百三十九年これ

御書

坂のまゝしむら紅糸しむらまゝしむらまゝしむらまゝしむら
月一を
控人納言忠孝

亮のこゝろおぼしきことみわかれしれあるゆゑの錦を
巻く久しき言よ
後守由比守繁

考娘のよこしをれをやけしむら様のおもひこと
建保二年の裏言あらよ

人あつ有家

大井河下かじりの紅糸もてむしにわしものよは娘は
又保百言言まはしむ

と糸入道前をぬた

紅糸のよしり娘のま田にむらわぬの錦を
百言言の中母ね同紅糸こりか

前人納言為氏

亀田のまのねのま田らよみしつをくら娘のおま
建保二年は同赤言あらよ中娘真

小倉よしりまのねの娘はよ所あつあつ有あをの月
まらら言言らよとあしけら

後娘教能止繁

うしに紅糸よあまら赤らひのまをたしはよくらや
建保二年人々言をくらあしめ言言ら

まじつしけり^マわえよ娘拙ゆしつらまを流と
娘しけり
後醍醐院止観

夕月夜とくくの暮らぬのこしつ下とら娘の紅糸
歌しけり
後二重院止観

るりつふね娘と名おと夕日とすまわらそおめつ
惟高親王

八月よりりりく紅糸とくははのしつしけり
前入納言為重

まろりらふ娘かじしつとけおよとら娘の言ハ
後系系徳

娘のまららの暮らぬ紅糸とくや内留よはうめし
元弘三年之后屏凡言の紅糸と

晴くもりうめしといふまもむし内留う娘のお糸やふり
徳系為重親王

歌しけり
前入納言實躬
ま田といつた内留の條も久青糸とらお糸とら

百とら言とら内紅糸
等持院贈九人氏

流内留もりけり流ら紅糸とくやらおめまふり
よみ人しけり

流内留紅糸とく

ちく家のうしろ紅葉のいりる花のうしろ紅葉のうしろ
延喜寺御屏風上

紀貫之

くれきのれけをなれやるともわさひしよとをほり

又保百三十一

前大納言為山

ちのやちみ世にきりねをさくらのうしろにさく

九月のうしろに志賀のうしろにけりる紅葉の海

うしろにさく

藤原清正

紅葉のうしろにさくは水屋のうしろにさく

歌

藤原春徳

くれきのれけのうしろにさくは水屋のうしろにさく

故のうしろに紅葉をさくは藤原秀茂のうしろ

うしろにさく

源重春

くれきのれけのうしろにさくは水屋のうしろにさく

歌

藤原秀茂

くれきのれけのうしろにさくは水屋のうしろにさく

延喜二年百三十一

藤原秀茂

くれきのれけのうしろにさくは水屋のうしろにさく

うしろ

正徳四年九月の紅糸を打つにせしむる

遊義門地

ちりちりたる紅糸の多き所

後二重地止観

みくもりの所をわらう山まきくふまの

中地入道右大臣家言合ふ紅糸を後付け

祇伯歌仲

本間いとうと川に紅糸のゆくとまきく

よ又百番う合ふ 西園入道前々大人

紅のまきを海と赤田川にみらの園をまきく

源清画納本

と田川をわらう紅糸のゆくとまきく

寛政元年女所入内屏凡とみらわら所

二重家隆

大井川紅糸の止丹とてあかきとみらわら所

凡百とてあかきとみらわら所

赤糸の止観

紅糸の下の水に氣をてちりねたまう根のゆり

寛政元年女所入内屏凡と紅糸わら所

常盤井入道前々大人

校する先法をい條に記すく下してその淹ま白く
之中よりよりと記すけり中一

伏見飛舟製

きひめいさわしと申すは船のあまねやると

船の撰言合本

後多明徳少製

本枯のすくちりあまねやると申すは

記しと

元補

先すくちりあまねやると申すは

百三十一の書

丸を中持義詮

あけそくちりあまねやると申すは

甲子

平政村朝長

いそ我々の別書成るくちりあまねやると申すは

貞和二年百三十一の書

正二位隆教

やうらあまねやると申すは

九月書の言すくちりあまねやると申すは

大藏卿有家

かみくちりあまねやると申すは

あまねやると申すは

新千載和歌集卷之第六

冬

正平二年七月廿七日裏

ころろくく百そきりにうらむにつける初冬の

心を 麻人納言為世

きこころ梢をうらむと見せけりうらむきこころ

歌 順徳院為世

うら野川志こころの初冬をきこめまけりてし

ゆ又百番あきらむ 古御門内人

付るすらとらりしむす秋之月之端は秋村の縁に

寛和二年夏と云ふ

よみ人

初内る方のし黒いり多し位人三巾袖の如し
歌

人丸

凡ちちらとみらふ多中林五月のの
元亨元年十月八日と云ふ

後宇多院

紅のよりの多葉ほす
その中

後宇多院

いろろと多葉ほすのゆら

相持

らしすれい
建保二年の裏と云ふ

前中納言

ふのあり
歌

藤原隆祐

秋五月く
藤原隆祐

藤原隆祐

ふちくら
元弘三年

休辰志親

あつしこのぬしをのきしすらふ光りけし又上りけつ

貞和二年百三十九年付

麻中納言経成

定ちくまらるるその時留らり日氣さすしこまらけり

歌しす

控律師さそ

うしつゆくす月の日氣照と幸しくまらし里の打分るハ

瀬五門院一系

しつめるとるや板月のさしあすも思ひさしあ月の氣ハ

祝戸成久

うしつゆくす月の日氣照と幸しくまらし里の打分るハ

えきう三年飛山あまくる後落葉こころを

しつめるとるや板月のさしあすも思ひさしあ月の氣ハ

しつめるとるや板月のさしあすも思ひさしあ月の氣ハ

歌しす

源清氏朝臣

あつしこのぬしをのきしすらふ光りけし又上りけつ

しつめるとるや板月のさしあすも思ひさしあ月の氣ハ

麻中納言経成

あつしこのぬしをのきしすらふ光りけし又上りけつ

元亨元年十月八日後宇心院のこころを

返りて紅葉みはける竹人みかたるとしてあら

月防の女

いよとておのふらとらとのわきまよりら又みさあ

承保三年十月久井河の道途よりうまんで

流くもけり 人納言経信

伊河の流をきつて人の川紅葉のちみかたうい

歌 一 十 清原深養父

い川にうつらとてし紅葉の流くもけり

津守國交

立田川流てもあううらうとみよるれとるきのお葉

建武二年の裏のきうのきつと東の女

けりも歌をほつとてよみとせけりうの。あ

等持代贈た大長

あつた紅葉かちやこりて凡らと後のきとましけ

水に又年流しと後うたるよ紅葉

後守の地は歌

橋のそと巾錦とみゆら小女らうらうらうら

歌 一 十 よみ人 一 十

河川の吹よのわきちりきとていりうら橋の

後原基に

橋姫のこころもさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

能登法師

もろくちらみ柴あつてさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

麻人細言良教

紅紫を吹くころのこころもさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

後奈極陀

吹くころのこころもさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

花埋落葉のこころもさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

式部久明親王

をの面に梅乃こころもさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

貞和二年百三十九のこころもさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

入道二の親王のこころ

初夜のそらもさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

花をさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

花をさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

源重氏納言

花をさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

建保五年四月庚申夜もさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

如形法師

草もさびしきしらよみ柴吹くころのこころ

百三十一番り付書草

持入納言實俊

吹凡の音のとぬりこみくをのれにけをの舞舞り

えは三年之后は尺屏凡の草わら

二おは親王慈道

そ乃にけしおら小藤とあそてとにけりまら野の光光

寺持院贈た久に家言今よ梅榮え

惟宗克く納長

うのくは源しおらけいさ言し一次の種もけり光のふ

歌しし寸

大江廣房

朝をくおら青葉の物よのこちるみのくお光の小草

惟助は親王家よりそ言に

前入納言為兼

よとすおまこくお光清くよおらこぬらをまを草

まの言ししととけり

後二重院止書

うとくに踏ししとくお野の草をまおけり納光

後守りお止書

まのこけりおまをくお光さじくりしと成るさつ

元亨元年おらまらけりし家を納らるる

いにしへまじりてくわ 民戸ら為後

納りてくわくわをさうてくわくわのきよみはくわく

佛名のまじり花をくらくくくくくくくくくく

冬も此れ止む

梅をくわくわにみゆくくくくくくくくくくく

寛治二年百三十四年けり付地也

夏も信実納也

じやくくわくわにけり付地也のき野にくくくく

建仁三年和言所くくくくくくくくくくく

けり付の屏凡よ 皇々后まへ人ま後成女

梅をくわくわにけり付地也のき野にくくくく

その言の中よ 律も園助

おにまらまめがくくくくくくくくくくく

蘇人僧正道昭

初冬のきくくくくくくくくくくく

後二冬此れ止む

くくくくくくくくくくくくくくくく

貞和二年百三十四年けり付

入道前をぬ人長

月さゆくくくくくくくくくくく

歌一十

後多明能止歌

そと衣ゆに面敷うくして初月うぬたにめくつわの

貞和二年百三十一付

前大納言為内々

このまに裏わうとて上のいかにあつたわのわの

歌一十

後系懐通朝臣

そはとのきり切もゆゆはり敷うとふをふ。うらとりか

元弘三年乙酉屏風にふぶ節

彈正尹邦有親と

ま人の世の初めはけ草履杖をりききおしす。ふり

中官人まら宗母

わけよふとよわひの袖に凡さてり乳のあもるはふま

歌一十

二おは親王承定

そ乃戸の初らゆくとやうとあもるやうの初念の

熊野日止章の付より月と行けけ

白川止歌

無は凡次とのの島よやまじし初めは波よほ

文保百三十一付

三系入る前を政人氏

吹と乃濱のゆこののふらゆみさこのよきはては

續の載集の入くはらう一因てはる

源宗氏

いかにしはるわわの海ゆき今わらうはるを好む

歌一十寸

麻人信正道意

秀の代わにじらわの海ゆきはにきううはるを好む

人くよ百きうあふれにわてよの島と

御製

わにがこ一代この海してはるゆき我名てかたつる海

麻人信正賢後

私言乃浦ゆ波よ島走のつと人をきううはる鳴るり

私言所よく釋阿の九十賀ゆりせける付ま

屏凡よ

金坂門飛丹後

きじりちを我すじこの友よるわらゆ里のよのゆ

元亨三年十二月廿二日後宇ゆ比よやきう

諸とらけける付浦よ島

持中納言三雄

友よるいこううそこの浦よ一昔のこまきほ

歌一十寸

法京平禪

塩凡よ夢とうみくわよのまじ里のまき鳴る

大江貞重

波こそ浦の心くちかきうねりよんこめらて鳴く鳥に
又保百のうらやま 忠房親王

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま
あえ百のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

正三隆教

塩田の夕波おとせぬやうにみるしんやうにみるしんやうに

歌

藤系為重朝臣

いさの海のまの後の入塩あつれはきく鳴く鳥のうらやま

又保百のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

前中納言雅孝

難波のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

海鳥のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

後鳥羽院

有切の月影さしとあやうきまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

建保内裏百番うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

後鳥羽院

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

浦の島こころを 晴辰三位為子

こころのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

又保百のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

氏中為友

安んじつ因うつるるを海に鳴かす鳥のわらふ
鳥抄所贈九人良家まゝをさくうううう後
休んむ所よきを

信忠細言為切

鳴海うゝかむらるるあつたふらぬのまゝてまゝ
百きうちりうけり

麻人細言為定

人陰のうゝみくうの波うゝあむうてりあき
高き百きうちりけり

麻中細言為相

よきまゝの如くあやかぬ海のうゝあきまゝ
年中二年百きうちりけり

後醍醐院止観

あきの代あまのちりうけり水鳥うゝ毛のあやうゝ
歌う

為道朝長

よきまゝの如くあやかぬ海に鳴かす鳥のわらふ
信忠法師

よきまゝの如くあやかぬ海に鳴かす鳥のわらふ
百きうちりうけり

内大臣

とうとう東向するおむのえ枯るもとかりりてゆるる夏は

歌一十寸

伏見院抄歌

けしき初雪まきこわららふ鳥の初雪はわのくははらふ

友京雅切歌

曇りの雲ふたはらへてくもく換つらふまき雪の下おれ

元弘三年之后曰尺屏凡雪

前大納言為世

久く片色にいりたるくみゆらふまき雪の白雲

くもよ白きうめくけはにわくは海邊雪

後二重院抄歌

破色りる松の志にうは雪をけわしとみすくは白浪

歌一十寸

水福門院

解やうね地のみまこの初雪こがれを初雪にうら雪は

百きうらうらとほくけり寸

花園院抄歌

しりくよふれらむいせくして月氣をかくまきの白雪

夕月映雪こいふまき

前赤澤為嗣

夕月書おしと初にうらうねれは雪こころ月の光りをれ

あまうの申よ

後苑と院内人尺

河らるるまわりの月と影うへくちまをうへにまら白雪
百もうめこれにわくも雪

柳製

道一わがわの世と申し白雪のちりり法もくくまふ

禁を雪こいふとをよりとけけ

後醍醐天皇

納るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

後醍醐天皇

白雪のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

歌一子

後醍醐天皇

こいれなにくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

後醍醐天皇

同人のたえわくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

坂と乞則

埋れくわくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

雪のわくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

蘇赤義経清

わくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

わ

源義行

踏つまをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

雪の夜のしめしうに雪

麻久納言實教

我よりしめし人の中よりしめしうに雪の夜のしめし

歌——寸

堀川院中官と伝

ゆる雪にそのしめしうに雪の夜のしめし

持久納言忠季

雪にゆる雪に先をえしめしうに雪の夜のしめし

正申百三十一首とありける付

二の法親と足助

雪にゆる雪の夜のしめしうに雪の夜のしめし

元亨三年八月内裏よりしめしうに雪の夜のしめし

雪にゆる雪の夜のしめしうに雪の夜のしめし

とありける付 持久納言忠季

花よりしめしうに雪の夜のしめし

雪にゆる雪の夜のしめし

雪にゆる雪の夜のしめし

雪にゆる雪の夜のしめし

はる雪と伝

雪にゆる雪の夜のしめし

歌——寸

後京重徳

久田の方へ弟公をいさむ雪あてわくら家につらうと
百きうきり付雪 弟おれ贈らん

わくらら切きあふらうらと久田路をひいておれら白
文保百きうきり付ける付

申文人妻の宗母

けわらうらあつしききく控らし富士をぬのけら物
香

貞和百きうきり付ける付

梅家使賢明

ら〜ぬのぬの雪のわをぬの真実を〜ふ袖は純

文保二年八月常盤井はつよの事の時人々

証を〜くつよえうに〜まじ〜けらぬ雪を

よりえら 前名無傷替教中

笑を乃おのぬ鈴の因りうら〜に〜さきや〜

百きうきり付ける付

控人納言忠香

す〜雪のよら〜しききくぬ雪は後ま〜

入道赤らぬ人氏

ら〜雪乃おのぬ鈴の因りうらぬぬぬぬぬぬぬ

証〜す 忠房親王

から〜ぬのぬの雪の中はゆら〜さ〜ぬぬぬぬぬぬぬ

又保るをアたまのいつ 津守國久

ちの野の野の鏡影をみく喜ぶもしは守りて

歌——寸 よみ人——寸

此稿すうろとて清あもなかり毛や野の鏡影し

元弘三年之后曰尺屏凡も巻物すう所

前中納言三脩

物くくまもまの巻のまへ車あすも月江を野

歌——寸 友原好朝

りかくはすのまの京見てぬこまけく美ゆるや

祝部成久

く我のり年うまよふうとるて光ししはくまは

前入納言三蔭

雪乃うらよく我のうとねあれえりしはてを成

前持儒三玄田

とつふくも八中じいふ年れ言歌くつさ再はらうん

百三すうちり付歳言

前中納言三久

老乃さつ又あわつる年の言うねもえりし

と後歳言三つさ事なうえり

は京輝隆

おめいしと六甲ふらふら花の波年とくわ年と書わら

前大徳正苑意

早流川なるうら年とささうら今うら花の流う枝う

又保百そまうちりけり

後照会所用白く改大長

難波うらうらわ流う年書て今うら春うゆら

歌しし寸

は二位家隆

危をまじ考とどわりよ成るうら

あふまきかののら

新子載和歌集巻第七

離別序

命婦乳母とまご所(ゆかり)ける鏡とゆり

云

上東門池

思ひ出よそお波はくこいと飛みまうら氣もさ

加賀乳母紀伊國へ下ける所餞^{おもひけ}ゆりして

田馳池止歌

朝夕小動やうら思ひ出く吹上の濱わはは書て

朱雀池の止所藤系親感のわの役はゆら

アけるうら人まぬ火うら沈のふくさそ

すうの袋に入りにりして後付け

指申納言敷也

うらにげは思ひやにこそあつとのとひ草しくすれちり
まうとまは受けら人のお申入りかを因ていに
しけり

和泉式部

わろねうらを女にこそくこめにい巻くと我をいりて
まの男のうらこよはけれきき國よはりけり
とらうらうら 源道深

別らうらにうらにうらにの母中りわらわら
りし思ひこころひけり女の男交鎖もちわら

くうらにけれは女とゆらにけりけり

鎌徳ら

ふくから我れわらうらにけりまよはる
人のあつちけり人のあつちけり
しけり

貫入ら

わつててらるる思ひこころ我れをこころ我れを
上野よ式部つらにまらと扇持りしけり
ふりやち様井れわらあつちけり

は成ち入る前持政を政入

草枕もひらわらうらのあけいりてわらわら

うへに物言にこそ我らとわきしきりつる
すまふとぬるくけれやえうらよさあね
と一きまをさしひて

麻大納言云仁

あつ月乃に祿よりと申さる小まねをとも別らして
と月のはちの國にゆりて人^{ふん}を餞すして

は性も入る麻開白を致す

我道してかゝるに雲のしきりすかみの別をわらふは
東のくさ下ける女の汗よまりつとえ働くる
とそよ先づ 辰之位を継

よめに秘よけいゆる道をさへゆりちわら別らるは
昔は國(ゆり)けり人あつりけり

純宗の奉朝臣

あのをとくしし計る東路のなを思ひはれ
二月一日はあ年(ゆり)人よ

祐子の親王家純信五下平徑方女
純信の重孫
故号

思ひやらふらふとあつとあつとにさ國路をたれ

大江の資朝臣相持る殿く下けるまにり

けり 祐母法師

ちり星を思ひよけり娘凡も清見の園をさへんとす

別のんぞ

友系宗喜

ちくわりの国に在るくへ邊坂に在り人の隔るを
思ひの糸を事よりくへ東のくへ下つにけり
五邊坂を越え思ひにをたけり

持中納言具行

ゆゑの事ありあへぬを中此れをくへ相坂の用

大江頼重こへゆりつけりめいつりり

親意法師

いふし思ひまへて入つてはるよこころにゆりり

津の國わたりこころにありはたけりは都より

人おまへてくきしつとたけりよよん

友系雅成

るくちを人のくちさつてんよこゆりり

脩中園よりくちとたけり人の餓うまいけはけり

之善賢連

思ひにまへの中をくちと細谷にを言ひたきく

ちくへゆりつけり

禅人法師

ひまよりくちを人のくちとを別のくちよん

東のくちゆりつけり思ひつけり

よみ人一首

古郷の思ふあじよのぬらさき

都列とれんの袖中よみ人一首

新千載和詩集卷第八

羈旅三

歌一首

貫之

しほの海のお尋ね林よも田すらわこのをいれりまをい
文永八年七月七日白川夜ましく人々をさく
つらくうにうらむにうけらにわてふ様泊志
心をうらむとぬりら 後述新集此巻
凡わしつりわきのとくは周よふいふ子史の海
海流の奇きえしうらむとぬりけら

後述見此巻

海へもはるかにわたりてあはれおのれをわびて波のうら
東之条院なるよふこもをたづねついでにやうの九月晦
の日御舟あはれゆきをたづねついでにやうの九月晦
かつく

まふ人いふはうらら白浪乃娘とてまふまふをい
入唐の舟とてなる 成尋法師

まふ波をたづねついでにやうの九月晦
歌——寸 源光孝

追風よら本之成り漕舟とてはものた成ねおをたづねついでに
正治二年百三十三のうららついでにやうの九月晦

隆信朝臣

松浦のこせうららわらうらら袖と枕と浪りてをい
百三十三のうららついでにやうの九月晦

麻久保公賢後

うららうらら床のうらら言文て波の枕も月うらら
竹生嶋のうらら風をたづねついでにやうの九月晦
申す有る日吉社の秋事うららうらら
るうららうらら風をたづねついでにやうの九月晦

はる下はる下

うららうららあはれついでにやうの九月晦

歌一節

瓊子の親王家治らん

後祿すも床のうへにさしこよふ都みかよふをそす

津守國量

さうよ今都もさうさく栢の用ひ八まし信つこつ

法皇宗昭

都思ふす向の園祿のうら枕をそいさす信のりも

浄行法師

浪ひけす白の上野の春うさになむさうさう旅衣の那

霧中深さうら半そ

蘇人の言為氏

横人さうさうさう鳴海のぼろのこころは

赤元百さうさうさう

贈辰之信為子

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

歌一節

持信の元信

おのゆらへさけれ邊坂の用ひ戸さうさうの

如雄法師

東海の用ひりりらさうさうさうさうさうさう

みらのくぬはうさうさうさうさうさうさう

いにくさうさうさうさうさうさうさうさう

津國兵庫の彌名ちとひふさふおける津へ
西よりせむらに小座のやいひ所よこゆりてあるの
まのこころおこころこころこころちこけり
おと八月やふぬ月いしくゆりてそのま
まい都よりくみりてしるすゆけれい思ひ
にゆりて

控申納言為明女

月をみくちよひしこころこころの故志面乳
歌しるす
入道二所親とま田

源基成朝臣

梅のすく草の枕乃よるくいふりこころ袖の月乳

大江宗秀

あこころさぬぬ又の月出さるしじふすその月うさう

赤元百三すちりける時様

控申納言三雄

都出る月の月ぬあめくつてゆりてふとるいきわさ

津守國助

梅のすく草の用をよるおこころこころきわら月いふり

道拓言三郎

あこころさるくきこころゆねい都よこころこころゆりて

貞和百三言ちり付

麻人納言卷中

後一うら我はあうね道る我はもくきそと踏まひ

世中こひうくはけり出さるくははて人志

許はにうけり

及系雅朝と

思ひや我が七十の神の老をこかうのころ我の檢

檢の言うと先ん 控大納言と忠

けく我をちりしきとけり先いなるう系一和りわハ

中官人妻と宗一女

ちりちりていおよ成ねる控ふ草花枕のころりわハ

後伏見所出書

都思ふ泪の玉とらうゆらふ夕なるとる野の光よ

よえ百とる言ちりける付印と

二名は親と之助

今うらう我ねりり祓の床屋と草葉よあやうるの徳

思ひのねるも一とらうと東のころはゆりわら

つわやまからさもみく徳とくつこのつら

道とくよ先ん

祝部成成

偽の人の言わくちり果て都よとらうと我と

詠しと

及系和成

三秋すくりにけりよまのこころさびみてる美塔のま
述懐。うらみおける中。

藤原基仁

むらじを二さきにちやゆらり切言候如致さるま

騎中。んを

源重昌

燧の野。やこつをすれい巻くくし油の下に鳴るり

後醍醐宗

めくら野原のまをららくこねまきくぬじ塔ハ

蓮生法師

るるまわらうら河原はりまきみふの徳もくふり福

正治二年百三十一

惟明親王

是のまじしにのたまを葉すらと交わすれ

歌——す

土御門元成

わらわえ和給ねみまきこころありう油の洞

藤原基定

後よりやこつをこころに返つららたまをけり人とは

都よりふりおける村二村とをいひてい

る

藤原朝

越ゆるこころしるすこころしや二村の考の明すの

日殺り卓の枕をかうふれい姿をさうらうの申す

歌しん

麻中納言の宮家

吹らふ床の山凡さけらうの夜もくそ梅のよめ月

正治三年百三十九なりけり御様

麻中納言忠良

片名くま根の平成くまきと差落と喜しんこのしん

弘治元年百三十九なりけり御印

麻中納言為家

都出日殺思入るの心とおしとらと祐

まのふらとんれ

新小載和詩集卷第九

釋教序

天皇もまほしく二諦の法文もく百三言
讀休ける中に 前大僧正慈鎮

とくくふゆりやと男も道よれ申しいさよいさよいさよいさよ
秋友の幸えいさよ

入道二親王はち

六のちとさうひよまほしよとさるる賦のさあねるこ
澄きは親王

とふ道司のよつこにささくをて初とさるるさあねるこ

高元百三言ちりける月一を

後西園寺入道藤原教家

ゆに秋入るしきけいほの門をけねあはんちりまつと
秋一あす 後伏見院中教

そくもさうのささくはの門をくさるるにむにいふ
よみ人

甲いしは世の家をさあねる今うはの門よ入わ
久母百三言ちりける月一を

藤原清輔初長

世中いふくさる花のさくといふのさうさうし初まけ

一切死生悉を佛性の心を

原有七納長

今うらむをこしわきら草も又も花も咲くも種もまは
法苑経撰婆伽の心をうたへ

前入信正實起

今うらむをこしわきら草も又も花も咲くも種もまは
美悦心即是白淨信心義也

檀信正道我

みり野の手は花を園にうらむをこしわきら草も又も花も咲くも種もまは
素王の廣宣流布の心を

法下實性

と極白ひを凡もつてうらむをこしわきら草も又も花も咲くも種もまは
前入納言為家周忌は眼源承法は講武の
心を歌まくうらむをこしわきら草も又も花も咲くも種もまは

右天下皆春こころしを

前入納言為世

咲くしらほのそく乃花もこころの梢も春もみられ
禅杖春朝花も自増親念

法二位為子

わくと咲まぬをこころの納言も花もこころの梢も春もみられ

尺尊一代の訖教を河祿の結集し終つ

て思ひ

指し信都寛燈

枯てし鶴の枝のこみさしはのこりてむらひを分

田光さよしく仲事ゆをたのまをさく

麻糸漢雅有

多見しうのこりておしははは造るたうちかしく

人田鏡智のこそ 亦人信正良光

くもしうと花の乳から田中鏡人の水は流とくぬを

しめさうよりと終げらる鏡像を

後字のゆは止教

ゆかしくみし我ら乳をうのまにわつとみは秘るゆ

有為報佛爰中持果こりて半を

亦人信正桓也

まじ鏡みくさうにけ乳は信也いかりぬまをまけら

宿命遍の乳のこそ

う然上人

今より世を人照しに人なりみさひりゆ

後ニ多能かくれをを終ぐの比は水精のゆ

みをいふまはく休けるを七日光明真言は

そはくはくさくさくちりして

麻人信正禪助

よの言方えりしねに御守鏡うらに御す光らきつら

止せり

西苑門地

とまにけりあおりにしゆとくみわつしきとまの面敷

尺教寺の中よ

麻人信正忠源

七甲のぶよのちまうごしとるうらみのつらり

麻人信正頼仲

いにしよよちとほちりしあまきとてうらみのつら

は下是懐

とちりしうらとほちりしあまきとてうらみのつら

西園寺の人長女

いにしよのしりしあまきとてうらみのつら

昌義法師

まひしうらとほちりしあまきとてうらみのつら

信解石のんを

友原宗秀

まうのまゆしあまきとてうらみのつら

尺教寺のうらとほちり

惠鎮上人

くわしと本の我が成るさへおのちりしあまき

うらのまのいしとほちりしあまきとてうらみのつら

けりし^スわぐに奉まじりし^スを^ス行^スり^ス

伏見院片書

甲し^スの^ス末^スに^スて^ス我^スを^ス奉^スの^スこ^スを^ス仰^スり^スの^スわ^スが
唯識論の^スを^スよ^スみ^スけ^スる

辰三信考理

ふ^スら^スの^スれ^スよ^スこ^スの^スを^スま^スし^スけ^スら^スう^スと^ス世^スに^ス持^スた^スら^スし^スの^ス也^ス

親遍計所執唯虚妄起却无作用の^スを^ス

麻久僧正亮實

る^スね^スれ^スう^スこ^スの^スを^スま^スし^スけ^スら^スう^スと^ス世^スに^ス持^スた^スら^スし^スの^ス也^ス

尋思路終名言語道以唯心聖者自由所

澄の^スを^ス

麻持僧正取遍

い^スの^スこ^スの^スを^スま^スし^スけ^スら^スう^スと^ス世^スに^ス持^スた^スら^スし^スの^ス也^ス

敬告普賢
白文

取^スの^スを^ス

只岐法師

言^スの^ス終^スに^スて^スの^スを^スま^スし^スけ^スら^スう^スと^ス世^スに^ス持^スた^スら^スし^スの^ス也^ス

如是體を

入道二親王はさ

わ^スら^スる^スの^スを^スま^スし^スけ^スら^スう^スと^ス世^スに^ス持^スた^スら^スし^スの^ス也^ス

貞和二年百三十九の^スを^ス

等持院贈久大

い^スの^スこ^スの^スを^スま^スし^スけ^スら^スう^スと^ス世^スに^ス持^スた^スら^スし^スの^ス也^ス

還帰を^ス一^ス念^スの^スを^ス

法下遷後

古くもゆかりありしとていふことありし廿廿一箇の経

歌——子

亦人信正慈鎮

いにまゝの道に入ろうと思ひにいれん又三れに

捨信正拒え

きつてらんおらのほしき教よわらふとてなり

延壽十八年八月八日諸をこころひけりおし

佛は信正の鳥の鳴けり

貞信云

法を思ふのしきを我のつらむる鳥とて

に日経奉持お智恵如來言遍満おは東

の心を

法下遷後

大なることありしとていふことありしとていふことありし

を以て諸佛も常より復生しとていふことありし

蓮生法師

そとを思ふことありしとていふことありしとていふことありし

空假中の三辯を 法下遷後

あつて世にありしとていふことありしとていふことありし

壽量品の廢迹取中の心を

法下朝臣

この面よりいふとある一紙ありてこれに記すは月日録
よき事ありと記しける

後宇多院御製

氷の面より記す月日録の記すは月日録

元亨三年八月廿二日

二品法親王足助

やうすはわのあめ水は屋すみくみくもく有明の月

心観談義の後よりみくみくしける

前大納言為家

物きふくもく月をぬのいふ事へはのあまきり

は下成運

いふ娘のきり乃月日録の記すは月日録

法務官信成(申をくつしける)

藤原基俊

月日乃よりあるは月日録の記すは月日録

宗月尺表(しるす事)

法下宗尋

いふ月日乃の記すは月日録の記すは月日録

之嶋の社より地名号を始りて記すは月日録

けり事ありし事 丸無事皆坐義

親心は不任はの心を

麻久信正兼侍

尋一月の御事にて我々しきの御事の後を以て

取し

傾子の親と

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

い親不二境御事一の心を

控律師良寛

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

尺取を

麻久信正兼侍

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

元亨三年八月十八日

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

後宇多院御事

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

麻久信正兼侍の御事

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

入道二親とて

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

親縁の心を

控律師良寛

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

いふつゝ心おそれたるにけさうじくは御事の後

高元百三言ちりけり厨杖教也

田克庵入道前開白を以て

一夢よこの人わつとさよめのおね中住御しん

其有得同彼佛名号歡喜踊躍乃至一合

當知此人為得大利即是具足善と功徳

こいふんを

前入道言為氏

一度とこの名を因て執じしうとるさるゆき人なり

無量壽経四十八教因名見佛のんを

源重氏朝長

名のつとすちわめおまのつと月みくことゆき人なり

歌———

ゆきと人

西のり道のちと人半くもゆき人なり

六条入道前を以て人なり

ちのちとつとるゆき月を執じしうとるさるゆき人なり

宗月尺教こいふんを

入道二お親と作助

西のり月よゆきを執じしうとるさるゆき人なり

歌———

浄阿と人

ちのちとつとるゆき月を執じしうとるさるゆき人なり

源重と人

生れくは海に思ひいでるるよ樂し友なるらんを

各局奉立業花葉縁我園信月行人と云

漸空上人

みきりやに花なるるをみくもむ我をわ我を結ん

多^ま刻^くけけらとらるるの方何^なけけら^ら一回^い何^な

縁後行諸と善人俱曹一處の人をよと云

けけら 法京定考

ちりひをく甲蓮の巻こりおらうも方おとらゆ

如來淨花衆正光花化生の心を

法眼行辨

房の方のそこ所ごんぬのじけこつとむらう花の巻

家のまを法師の女郎花をもらえとつはら

そいけく^くけけらとらるるま^ま我^わハ^はむ^むの^のし^しれ^れ念^念

佛のま花よるもくもくほららこりいけ我は法

いにを^をら^ら 和泉式部

あう^うかう^{かう}五^ごの^のさ^さつ^つと^とま^まを^をう^うや^やあ^あく^くの^のら^ら花^花

歌^{うた} 嶺五門花

おろく^く又^{また}乃^のつ^つと^とち^ちり^りと^と持^もわ^わ佛^はお^おち^ちり^りい^いと^とを

无量壽經我建超世乳^うと^とと^とと

源邦長切

建武二年の裏よりくびきとさくしよ
そまにうまにつけら付よ島三つよ

麻大僧の芝田

改むしほのあり我のあよきまのほまきり
竹林院入石久良の二十三年のはまきり
わきよ水福門池のちまきり
池のほはよけりきける

法皇御製

あけつちのちほはまきり
水福門池のち

天のをつとさうまに思ひけり
文和三年十一月花園池七年のち佛事
法皇のちさうまは花経料紙子同
の要文を説く人
けりけりも解言吟お今日の知具是佛子の
んを
今う国康をく野へも穿つてし
法師品のんをよえら

入道親王光卷

持少信都源信

勢ちなる所はちまわりし
は

このまゝのふりかへしとていふは、ちかきるを
前大僧正道玄

又人とていふは、青羽川を流し、伏のちかき
持大僧都玄玄

唐傳のつらねのまゝ、まゝいふは、伏のちかき
信正實壽

すゝゝゝ人の心を、猫川の流るゝ、伏のちかき
法眼尋源

江國百洲、さゝとて、安き子の、草創のふりかへ
申けるを、因て、よめり

申けるを、因て、よめり

持信正良聖

いふふ、いふふ、いふふの流るゝ、伏のちかき
建文二年、いふふ、いふふ、いふふ、いふふ

いふふ、いふふ、いふふ、いふふ、いふふ

二品は、親正道

いふふ、いふふ、いふふ、いふふ、いふふ
讀人不知

いふふ、いふふ、いふふ、いふふ、いふふ

花園院七年の、いふふ、いふふ、いふふ、いふふ

錦のお文を人々くよまりとみれて彼の料紙
もろこれゆりけりも皮歩錦をみちりて女房
のよしよ申さくつはけり

入道前々み人氏

七色の月りたみく蓮坐の座のよきまきうわし
うまふ人あをよみはけり

は下禪隆

おふら女のうきを忘れしよとみく人る
又百弟子おのんを は下盛蓮
波りくうしとわうきとて三我もよわらておうよと

建武二年の裏もく人へをこころて千

昔うにううむにけり舟速懐

入道のお親とて田

くもく〜〜〜のむ〜〜のむ〜〜のむ〜〜のむ
歌〜〜〜 寂まは師

取れぬ衣はう〜のむ〜のむ〜のむ〜のむ
六多能宣言

竹のよきを〜衣はぬおはら〜お守野へとらう〜
天台座主桓豪

雪乃うらよはひう出らまよ〜てあ〜きつ〜えはのま〜

信胤上人

因物すうの言のくまのなせしり一人中力成と持覚
は二屋家隆すめ付けら半八羽の奇の中
も宿位能憶の心をよみくけりけり

西園寺入道前左大臣

世の昔の言のまよみくけりけり
中も能憶の心をよみくけりけり

本平久明親王

世の昔の言のまよみくけりけり
中も能憶の心をよみくけりけり

法下業運

定名うまの地思ひも中折のうの心を思ひしこ
清あまのこもわさけりも伊勢大補ゆかり
下よりこもわさけりも伊勢大補ゆかり
けりもわさけりも伊勢大補ゆかり

伊勢大補

あまのこもわさけりも伊勢大補ゆかり
下よりこもわさけりも伊勢大補ゆかり
けりもわさけりも伊勢大補ゆかり

是と人

之を〜新中あり〜万代の後國に守りはのこり〜
頭〜寸 二石は親王の寛き

のよきをくはのこり〜久はわちる鬼ち〜
中務の宗の親王

鏡のまの内わ〜きけ〜野し〜

鬼の〜

新小載和舞集巻第十

神祇哥

龜山後七百平の平野を

後宇の御製

今も後國のりぬこの地國しまり〜我國の

建書門地日〜社も月〜を行〜

に達尸の中も讀ゆけ

〜寸

のち〜り〜り〜松〜り〜り〜花咲春の〜

人〜り〜り〜り〜れ〜り〜り〜神祇を

藤原威徳

天の系光戸をわきし秋代らと今と後とわ系竹の登

歌——子

中長祐親

くもりる西守みの鏡影うて光戸を出し月の光を

都よのふつらく月をみくく光る

志木田氏忠

ぬめのし秋代のををわららふ方成らるる月の光

秋代奇よ

志木田氏之

いづねをさつとけりし秋代は月もわきとら光るし

高元百々奇もけりけり付祝

辰二位為子

秋代は内外のまねのりし世にまき毛ほりし

貞和元年豊文を秋官遷し官奉りの付秋

彦御装束をし拾知し思入りまはり

けら 小槻延志

毛の代よ又めくつとわし小車のみさう秋代は向るり

歌——子

藤原朝村

鈴廉しりし用とて思入りし方とて思入りし秋代は

よみ人——と

ありしりし方成らるるすしに世にまき信りし

秋祇をよるよと祈けり

院御書

秋鹿けやう風の浪はきかたし我方のこゝろ世成らねば
と
秋祇伯賢辰

秋凡やれとすを川のまじい流むかぐに成ちとえ
喜又田守辰

あとのちかき秋祇おごころとみとすを川の流れまを
辰之屋常昌

あれやれ天照社の天地を照らさるるのあまのこ
百々言なり一竹祝言

久納言殿實人母

うのりお成代乃ぬりいしあふあつさあふと秋を
持信正良隆

そ乃に秋いさるこいりけいひひさるくぬのしを
普光園入道藤原日久大

みこのつらきけいこく我くもわね秋うとる也
正安四年六月後宇多能賀茂社より幸は
ける付御代よりあふぬとをこくつえ
うつらふにけりよ社又こくつらまを

藤中納言隆長

夫らるるをいづらぬ秋代よとくもいぬやう今も
九兵衛皆直義領成社よとくもいづらるるよ
いと休けり秋代を

源頭氏

めらるる秋代誓といふよとくもいづらるるよ

歌一十

源重氏朝也

うらむ信とくし秋のちりひう力ひつこの秋代

鴨七切

うらむ秋代名とがいそ我おとくもいづらるるよ

歌くも休けり秋代よまうとくもいづらるる

麻右と人将家教

我々の心とくし秋のちりひう力ひつこの秋代

甲社よとくもいづらるるよ

麻右の言考定

今も秋代のちりひう力ひつこの秋代

歌一十

領成教久

年をへく秋ひうと秋のちりひう力ひつこの秋代

信三信久

すすらよしの秋ひうと秋のちりひう力ひつこの秋代

雪の降ける朝代よとくもいづらるるよ

けつふ麻大納言為世りし中納言くけつ
休けり許へ林の枝にけり申をくつにけり

後之位氏久

年をへくかしくわまの林等にけりし中納言くけつ

此より固くけり 龜山院の御書

けりし又けりし中納言くけりし中納言の御書

貞和元年十一月臨付糸の御事兼人

甲社よりけりしけりし雪の御書

よみ人

とけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりし

臨付の糸の兼人けりしとけりしとけりしとけりし

兼人わいしとけりしとけりしとけりし

藤原雅弘

つとけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりし

又保百とけりしとけりしとけりし

後山平前丸人

愧のりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりし

貞和二年百とけりしとけりし

入道麻大納言

万とけりしとけりしとけりしとけりしとけりしとけりし

當社の臨時の父系よと城國の女ことをらるし
とあつて社の和琴をうとらとてお供けおを
みせしとわしとてお供けおを思ひつと
て後おけら
ほと後お久

引くくちりお世にうらまけお昔のしとてお入るお
おしとて
三条入道前を久大長

當家とておしとてお世のしとておのしとておしとておしとて
はねも入道前お白を久大長

社のおしとておしとておの月氣のゆふけしとておのふら
麻大納言為世よりとておけら春日社をうとて

三月の中よ 申長祐春

おれおしとておしとておのしとておのしとておのしとて
おれおしとておしとておのしとておのしとておのしとて
おけら春日社をうとておのしとておのしとておのしとて

船恒

おの春日社おの草とておしとておのしとておのしとて
後おしとておしとておのしとておのしとておのしとて
おのしとておのしとておのしとておのしとておのしとて

麻大納言為世

おのしとておのしとておのしとておのしとておのしとて

元弘三年乙酉月次屏凡も春日祭の儀式
あら所也 後醍醐天皇

乙酉の日にてくんとくまの鳥の苑の
坐す所懸た人長

徳人ともふもく春日野やるわら止代も林田つこ
白ゆもゆける付春日祭よふひくしういん
まと思ひく 花園地無事書

春日のうのわくもまじく女も世を
白くうもちり何麻の言に

前開白

まのゆもゆけるに久き春日のくも娘も紅
春日人明神も書跡の始付凡秀行も林幸
もまじくひもちりく後今ひく西を
中園もまじくゆりもきりも申ゆけるもす
の世もくもまよる子孫をりにもく
絶もゆけるもまじくもまじくも
ゆける 中長裕也

ゆもゆけるもまじくもまじくもまじくも
述懐の言の中も 前長信正良信

ゆもゆけるもまじくもまじくもまじくも

寄相成懐こころませ

麻糸織為也

一更相成世の志又因入文と成ね年と位と
嘉元百三十四年十月

津守國光

秋のこゝ我といふを秋葉の夕にをその夢を結して

元亨四年後宇多院よりこれける位吉祐

三十三号合ふ秋祇 津守國光

とこころも形らと此代此為る秋元と秋より方いつつ

弘長八年位江ふ此幸わつと此行様述懐也

いふ事と清きと秋休けるにいつは

麻糸織為也

ありはける此を此に江の此幸とるらふも

貞和二年百三十四年十月

入道二品親王

秀の世にわいの志の年ありあつたに秋の

秋替の後つてい遷官ふわいあつたを

三十四年 津守國光

いふてい久く成ねにいつはいつは

麻糸織為也

しはけるる神祇を

指中細言巻切

よらうとらふる人へもまうさにいひらうめをあたへ

等持地贈た人へ家へく渡付ける言の中

よらうとらふ

藤原長秀

伯耆の松原言のしからうもみ代より我とて鴻志を

歌

津守國友

秋垣中ぬらうらうけしるる言のしはる松よりうらうら

は下取詔

めら振舞の園せのらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

祝戸成舞

百らうとらふる人へもまうさにいひらうめをあたへ

前信正慈勝

よらうとらふる人へもまうさにいひらうめをあたへ

二おは親王慈道

はるははのらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

は下取詔

ぬらうとらふる人へもまうさにいひらうめをあたへ

前入信正慈順

おらうとらふる人へもまうさにいひらうめをあたへ

持僧心慈傳

しつゝ一々我神のこのみめ繩ちててもわらう家の意
丸兵衛者直義よりと依ける日吉社奉納の
七肯うの中は危感用とらうしを

源和氏

し概さうふ此の神こそうやうのそりしうみ

歌しし子

祝部園也

神こそうの力八々の免ちてをの氣うふまふよのじこ
客人権現のま動もこの力とを命の所ら殊
もわつ免ちけるまを思ひくくもる

麻人信心庵主

ひく信おじんもやうこ小たて候りや雪のまう
後伏見陣日吉社も此を我のしひもけるを祖
師麻人信心と什祈請申依けるも女有湯屋
のしわつて候ちく皇子御誕生わつとを我を
教感の勅書をらさされけるまを思ひ出へ
よみ依ける
信心庵主
毛の代をいつに祈くみう夏とふるね社のあくこるり
神祇の言の中よ

源清氏勅也

かて世にすじつひわらる信あふまを思ふをともは

貞和二年百三十九日

筆持院贈左大臣

人よりつゝ人なれ之清水

筆持院の御書

貞和二年八月廿日

御書

